

ポライトネス・グラマー — コミュニケーション行動評価概念の日韓比較 —

南 相瓊・西嶋 義憲・斎木 麻利子*

ポライトネス (politeness) とは、コミュニケーションを円滑に行なうために必要な、コミュニケーション参与者間の配慮行動である。本稿では、まず、このような配慮行動の背景にある要因を、社会的および心理的側面から分析する。また、これに基づき、ポライトネスを普遍的に説明するための文法モデルを提案する (ポライトネス・グラマー ; Politeness Grammar)。さらに、このモデルを用いることにより、日本語と韓国語におけるコミュニケーション行動評価概念 (evaluating concept of communicative behavior) が、客観的な形で比較可能になるということを主張する。

キーワード：ポライトネス、社会的接近距離、心理的接近距離、コミュニケーション行動評価概念、通常性

1. はじめに

日常的なコミュニケーションにおいて、相手と社会的・文化的背景を共有している場合、自分の行動に疑問を抱いたり、相手の行動に違和感を覚えたりすることは、それほど多くない。

しかし、社会的・文化的背景を異にする者が対話相手となった場合、相手の言動をおかしいと思ったり、自分自身の言動が相手にうまく理解されていないと感じたりすることが頻繁に起きる。これは、自分にとって通常ごく当たり前のコミュニケーション行動が、当たり前のものだと感じられなくなることに起因する。すなわち、この場合、自分が想定している通常性 (communicative normality, cf. Eelen (2001), 以下 CN), とりわけ、ポライトネス (politeness) に関わる CN の具現化が成立しなくなっているのである。

一般に、コミュニケーション行動において、人は、相手も自分と同じルールあるいは習慣に従って行動していると想定する。これは、コミュニケーション参与者全員に当てはまる態度である。ところが、社会的・文化的背景の異なる者同士がコミュニケーション

ションを行なう場合、それぞれが、自分の社会・文化に通用している CN を前提としながら行動しがちである。そこに、CN の違いによる「ずれ」が生じる余地がある。そしてその結果、円滑なコミュニケーションが成立しなくなってしまうのである (Marui 1996)。

CN のずれは、コミュニケーション参与者間で、ポライトネスの様式・様態そのもの、あるいはその解釈が異なる場合に生じるものだと考えられる。ポライトネスとは、コミュニケーションを円滑に行なうために必要な、コミュニケーション参与者間の配慮行動のことである (Ide 1988)。また、これは、CN を具現化するための重要な要素でもある。ポライトネスの様式・様態は、社会・文化または個人に依存しており、コミュニケーション参与者間で、共通な場合も、異なる場合もある。

したがって、異文化間コミュニケーションを適切に分析し、理解するためには、CN の具現形式としてのポライトネスに着目し、それを客観的に記述する手立てが必要になる。

ポライトネスの研究では、Brown & Levinson (1987) が有名である。Brown & Levinson (1987) は、スピーチ・アクト (speech act) を研究対象とし、フェイス (face) を脅かす行動 (face threatening act) の深刻度は、文化によって異なるということを指摘している。また、そのような深刻度の違いを計測するために、ある公式を提案している。しかしながら、その公式は、スピーチ・アクトの文化ごとの違いを説明するためのものであり、個人のコミュニケーション行動を説明するものではない。したがって、Brown & Levinson (1987) は、コミュニケーション参与者間に観察されるポライトネス評価のずれを捉えることはできないのだ。

本稿では、コミュニケーション行動評価概念 (evaluating concept of communi-cative behavior)¹⁾ を研究対象とし、その背景にあるポライトネスに関わる要因を、社会的および心理的側面から分析する。そして、それに基づき、コミュニケーション参与者間のポライトネス評価のずれを説明する。

日本語のネイティヴ・スピーカー（以下 J）と韓国語のネイティヴ・スピーカー（以下 K）両者のポライトネス基準が確保されているコミュニケーション場面を想定してみよう。その場合、地位の差があるにもかかわらず、上位の者が下位の者に接近してくることを、J は、「気さくだ」という表現を用いて評価することがある。しかし、韓国語には、これに相当する慣用化された語彙が存在しない。一方、下位の者が、上位の者に対して、乱暴な言葉遣いをした場合、J も K も、それを否定的に評価し、それを表現する慣用語彙は、日本語にも韓国語にも共に存在する。

このような日韓のポライトネス基準の相違点（ずれ）および共通点は、コミュニケ

ション参与者 A と B のそれぞれが、お互いに対して想定する、社会的接近距離に起因すると分析される。社会的接近距離 (Social Distance, 以下 SD) とは、A と B のそれぞれの背景にある社会や文化、また、時代や地域などの環境に影響され、規定されるものである。また、AB 間に想定される年齢、性、職業、地位、学歴などの違いが、SD を決定する要因になる。したがって、たとえば、同年齢、同性、同職業、同学歴を持つ A と B の間の SD は、きわめてゼロに近いと考えられる。また、年齢、職位、学歴などの差が大きければ大きいほど、A と B との間の SD は、長くなる。

さらに、J と K のコミュニケーション場面において、K が自分のポライトネス基準に従って行動した場合、J は、K の行動を「あつかましい」「ずうずうしい」と感じることがある。逆に、J が自分のポライトネス基準に従って行動した場合、K は、J の行動に「スマート」「サマセマハダ」という印象を持つことがある²⁾。

この場合のそれは、コミュニケーション参与者 A と B のそれぞれがお互いに対して期待する、心理的接近距離のそれに起因すると分析される。心理的接近距離 (Psychological Distance, 以下 PD) とは、コミュニケーションの相手が、自分にとってどの程度身近に感じられるかの度合いで測られる。相手を近しい人物だと感じている場合には、相手との間の PD は短い。一方、相手を身近に感じられず、心を開くことができない場合には、相手との間の PD は長い。

ここで注意すべき点が三つある。

第一に、上述したように、SD は、コミュニケーション参与者 A と B のそれぞれが置かれている環境によって規定されるものである。それに対して PD は、A と B が置かれている状況（コンテクスト）の変化に応じて、それぞれの意識の中で、相対的に変容（伸び縮み）するものである。要するに、SD が、社会・文化的なポライトネス要因（ポライトネス具現の背景にある要因）である一方、PD は、個人的なポライトネス要因なのである。

第二に、SD と PD を用いることにより、ポライトネスの概念を操作的に規定できる。なぜならば、ポライトネスは、相手と自分との関係を適切に判断することに基づいたコミュニケーション行動であり、その判断の基準が、SD と PD にあるからだ。

最後に、SD と PD は、両者とも、許容範囲を持つものと仮定する必要がある。コミュニケーションにおいて、ポライトネスが満たされた状態は、無標（unmarked）であり、様々な様相を呈している。また、その様相は、円滑なコミュニケーションを阻む有標（marked）のケースが特定されることにより、初めて定義されるものである。

たとえば、J は、コミュニケーションの際に、相手に親しみやすさを期待する。しかし、対話相手は、期待した以上に近しい態度をとる場合がある。その場合、J は、「な

れなれしい」「親しき仲にも礼儀ありだ」といった表現で、その態度を評価することがある。逆に、対話相手が、期待するような親しみを表わさない場合、「よそよそしい」「そつれない」といった表現で評価することもある。

このような、ネガティヴな評価に繋がるケースが有標のケースであり、ポライトネスは、これらとの関係で、相対的にしか定義され得ない。ポライトネスは、絶対的な値を持たず、その具現の仕方にも広がりがあるのだ。上述したように、ポライトネスの判断基準は、SDとPDにある。したがって、ポライトネスの操作的定義の際には、SDとPDの両者に幅を持たせる必要があるのだ。

2. 本稿の目的

本稿では、コミュニケーション参与者間にSDとPDを仮定することにより、言語によって様相が異なるポライトネスの概念を説明するための普遍モデルを提案し、これをポライトネス・グラマーと呼ぶ(Politeness Grammar)。そして、このモデルを適用することにより、日本語と韓国語におけるコミュニケーション行動評価概念が、客観的な形で比較可能になるということを示す。

このような研究は、当該分野では現在までに存在しない。また、コミュニケーション行動評価概念の対照には、十分な関心が向けられてきたが、客観的な手法を用いて調査・分析を行っている研究は、数少ない³⁾。

Ide et al. (1992) は、そのような研究のうちの一つである⁴⁾。この論文では、「ていねいな」を始めとする10個の日本語の基本概念と、これらに対応するアメリカ英語の基本概念が比較されている。また、その結果に基づいて、両言語の対応する概念について、共通点と相違点が指摘されている。これによると、アメリカ英語の個別評価概念である「polite」と「friendly」は、概念上互いに似ているが、日本語の個別評価概念である「ていねいな」と「親しげな」は、互いに対立している。言い換えると、Ide et al. (1992) は、「polite」と「friendly」は、同じカテゴリーに属するが、「ていねいな」は、「親しげな」と別のカテゴリーに分類されると分析しているのである。

この分析は、次のような問題点を含んでいる。日本語の「ていねいな」は、円滑なコミュニケーションの総体を指し示すという点で、確かに、アメリカ英語の「polite」に対応する。これらの表現の社会的・文化的使用背景が異なっていたとしてでもある。しかし、日本語の「親しげな」が、アメリカ英語の「friendly」に対応しているかどうかについては、疑問の余地がある。このことは、Ide et al. (1992) でも意識されており、次のような指摘がある：

Sitasigena was chosen for the purpose of the questionnaire, as an adjective corresponding to friendly, because it is the form describing the mood of someone else's behaviour rather than the subjective mood of the speaker. *Sitasii*, instead, is the form representing the speaker's subjective psychological feeling (p. 294, fn. 9).

「親しげな」という表現は、他者の行動様態を表わすだけでなく、「親しさ」の外見性をも強調する。また、場合によっては、この表現の使用者側に、隠された意図が存在することを暗示させるものもある。なぜなら、接尾辞の「～げな」は、否定的なニュアンスをかもし出しながら、物事の外見を強調するという用法を持つからである。「親しげな」は、「親しそうだが実際はそうではない」ということを含意し、そしてこれは、アメリカ英語の「friendly」には、決して付隨しない意味的要素なのである(Nishijima 2000)。

以上の点を考慮すると、Ide et al. (1992) によって、「ていねいな」と「親しげな」が互いに対立する概念であると見なされるのも当然である。なぜなら、「ていねいな」は、「ていねいさ」そのものを携えているとする表現である一方、「親しげな」は、「親しさ」を携えていないことを表わす表現だからだ。

また、もし、「friendly」に対する概念として、「親しげな」ではなく、他の日本語表現が選ばれていたならば、Ide et al. (1992) の調査結果は、かなり異なったものになっていたはずである⁵⁾。

このような指摘から、コミュニケーション行動評価概念についての異なる言語間の対照研究では、対応する概念、あるいは類似と見なされる概念を見つけ出すことが、きわめて難しいことがわかる。そもそも異なる言語において、片方の言語における任意の概念が、他言語における任意の概念に、一対一で対応するとは限らない。よって、概念の対応関係を導き出したり、それぞれの社会・文化で円滑なコミュニケーションを行なうために有効な概念を抽出したりするためには、概念自体を操作的に定義し、それに基づいた比較調査を行なう必要があるのだ⁶⁾。

次節では、そのための道具立てを提案する。

3. ポライトネス・グラマー

本節で提案するポライトネス・グラマー（以下 PG）は、コミュニケーション場面において、話者・聴者（speaker-listener）が自己のポライトネス基準に基づいて行なう、2種類の行動を説明するものである。一つは、話者側に立った場合の、ポライトネス

の具現である。もう一つは、聴者側に立った場合の、対話相手によるコミュニケーション行動の解釈・評価である。

本節では、このような PG に備わった、主要メカニズムをデザインし、その役割について解説する。

3.1 前提

第1節の議論より、ポライトネスを反映するコミュニケーション行動評価概念を、客観的に記述・説明するためには、次の 2 点を考慮する必要がある。一つは、ポライトネスは、SD と PD を仮定することにより、操作的に定義されるということである。もう一つは、ポライトネスの具現様式には広がりがあり、よって、その要素となる SD と PD は、幅を持つものとして定義されなければならないということである。

本稿では、この幅を、コミュニケーション参与者が、相手との間に想定している、SD および PD の、理想値からの誤差を反映するものだと仮定する。ここで言う誤差とは、コミュニケーション場面において人が持つ、対話相手が社会的・心理的に自分に接近する、あるいは自分から遠ざかる場合の、許容範囲を反映する。

コミュニケーション場面において、対話相手が、SD, PD の許容範囲を超えて自分に接近してきた場合、または、自分から遠ざかった場合、人は、相手の行動を、自分が想定する CN を逸脱したものと判断し、ネガティブに評価するのである。一方、対話相手の自分までの距離が、この許容範囲内に留まっていると判断される場合、人は、相手の行動をポジティブに、あるいは当たり前だと評価するのである。

3.2 グラマー・デザイン

上述したように、コミュニケーション場面におけるポライトネス要因は、対話相手との間の SD と PD によって、操作的に定義される。

本稿では、これをまず、座標系として規定するために、グラフ上の 0 (ゼロ) 地点を対話者本人の置かれている位置とし、y 軸上に SD, x 軸上に PD を定める。すると、これらと相対的に、グラフ上における対話相手の位置が、図 1 のようにプロットされる。

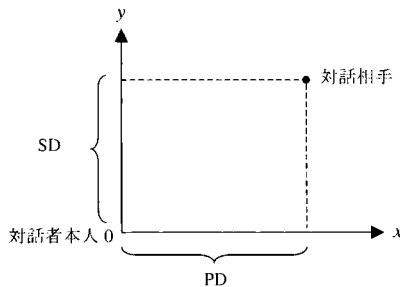


図1 グラフ上に表示される SD, PD, そして
コミュニケーション参与者の位置

さらに、対話者本人の位置、対話相手の位置、対話相手の位置から垂直に降ろした直線と x 軸との交点を結ぶと、図2のような三角形が求められる。本稿では、この三角形を、ポライトネス三角形 (Politeness Triangle, 以下 PT) と呼び、話者・聴者のポライトネス基準を記述・説明するための、PG に備わった主要装置であると位置づける。

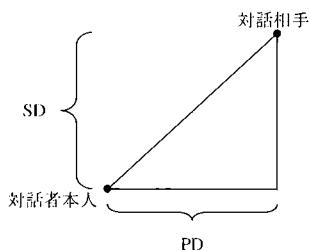


図2 ポライトネス三角形 (Politeness Triangle; PT)

PT を仮定すると、第3.1節で説明したような、対話者が対話相手との間に持つ SD と PD の許容範囲は、図3のように、PT 表示に組み込まれる。

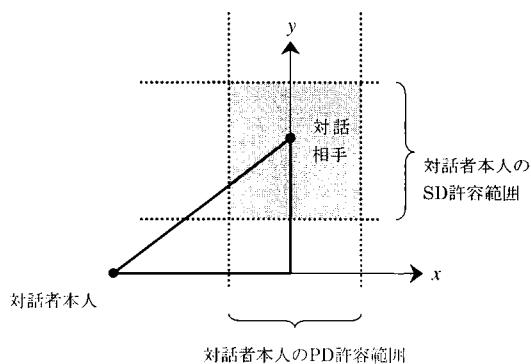


図3 SDとPDの許容範囲

図3からもわかるように、対話相手をこの図のグレーの四角形内にプロットすることによって、様々な形状のPTが求められる。そしてこれらが、ポライトネスが具現される際の、多様な背景を反映するのである。

ここで注意すべきなのは、PTならびに許容範囲の四角形は、個人のポライトネス基準を反映するものであり、社会や文化、時代や地域の構成員間で、必ずしも共通するものではないということである。人はそれぞれ、コミュニケーション場面において、対話相手が図3のグレーの四角形内にプロットされる、と判断する限り、自己のポライトネス基準に応じた行動を取るのである。

しかし、コミュニケーションの過程において、対話相手のある言動により、そのプロット位置が、図3のグレーの四角形外であると判断される場合がある。そのような場合、自己のポライトネス基準を、コミュニケーションにアプライすることが困難になる。そして、その結果、円滑なコミュニケーションは成立しなくなる。最悪の場合には、コミュニケーション自体が、ストップしてしまうこともあるのだ。

以上の議論より、PT表示は、次の二つの機能を持つと言える。一つには、コミュニケーションにおいて、ポライトネス具現がなされる際の背景要因を表示するという機能である。もう一つは、対話相手の言動を、どこまで容認できるかという、判断のための尺度を提示するという機能である。

3.3 デモンストレーション

コミュニケーション参与者をAとBとする。さらに、Aが部下、Bはその上司であるとする。

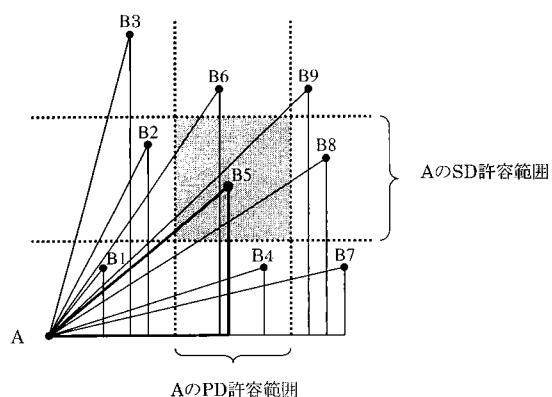


図4 A(部下)がB(上司)との間に想定するPT

このケースでは、A の社会的地位は、B よりも低い。この差は、SD の差として、グラフの y 軸上に表わされる。よって、図 4 のように、A から見た B は、y 軸上 A より上にプロットされる。

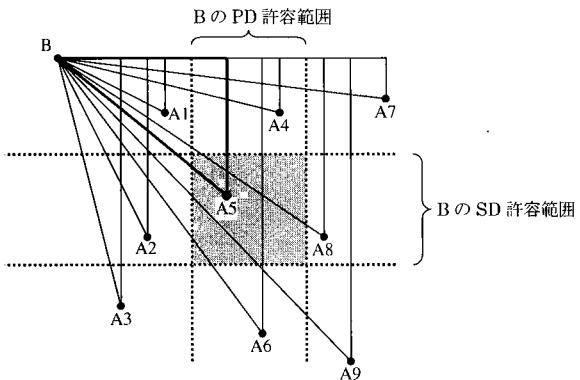


図 5 B(上司)が A(部下)との間に想定する PT

一方、B から見た A は、図 5 のように、y 軸上 B より下にプロットされる。

また、PD は、第1節で述べたように、社会・文化によって定められるものではない。したがって、A と B が想定する PD は、相対的かつシンメトリックな関係を持つ。よって、両者とも、図 4 と図 5 のように、単なる x 軸上の距離として表示される。

さらに、A と B とのコミュニケーション場面において、ポライトネスを実行する際に、A が B との間に想定する SD と PD は、図 4 の太線の PT、一方、B が A との間に想定する SD と PD は、図 5 の太線の PT によって例示される。これらの PT において、A が想定する B の位置、B が想定する A の位置が、それぞれ、B5, A5 として、互いの接近許容範囲を表わすグレーの四角形の内側にあることに注意してほしい。

しかしながら、コミュニケーションの過程には、A, B のそれぞれが、相手の想定するポライトネス基準から外れてしまうような言動を行なう場合がある。これらのケースは、PD と SD が許容範囲を超えて、縮小するか、または拡大するかという基準で分類され、論理的には、表 1 に挙げる 8 通りある。また、これらのケースは、図 4 と図 5 のそれぞれにおいて、普通線で記した 8 種類の PT によって表示される。

表 1 SD, PD の許容範囲を超える縮小・拡大を表わす 8 通りのケース

ケース	SD, PD の 縮小または拡大	図 4 における B の位置	図 5 における A の位置
1	SD, PD 両者が縮小	B1	A1
2	PD のみが縮小	B2	A2
3	SD が拡大, PD が縮小	B3	A3
4	SD のみが縮小	B4	A4
5	SD のみが拡大	B6	A6
6	SD が縮小, PD が拡大	B7	A7
7	PD のみが拡大	B8	A8
8	SD, PD 両者が拡大	B9	A9

3.4 PD 概念と SD 概念

PD, SD, および, それぞれが許容範囲内に収まるか否か, という尺度を用いることにより, コミュニケーション行動評価概念は, 次の二つに分類される。

一つ目は, 専ら PD 上の操作により, 普遍的に説明される概念グループで, たとえば, 日本語の「気さくだ」「よそよそしい」「ずうずうしい」がこのグループに分類される。また, PD の距離という観点から, このグループに属する概念は, 次の 3 種類に分類される: (i) PD の距離が, 許容範囲内に納まる場合の評価概念, (ii) PD がコミュニケーション参与者の許容範囲を超えて拡大している場合の評価概念, そして, (iii) PD がコミュニケーション参与者の許容範囲を超えて縮小している場合の評価概念, である。このようなコミュニケーション行動評価概念を, 本稿では, PD 概念と呼ぶ。

PD 概念に対するもう一つの概念グループは, 専ら SD を仮定することにより, 説明可能なミニケーション行動評価概念を含む。本稿ではこれらの概念を, SD 概念と呼ぶ。たとえば, 「ひかえめだ」「へいこらしている」「生意気だ」が日本語の場合の例である。SD 概念は, PD 概念と同様に, SD の距離および許容範囲という観点に基づくと, 次の三つに下位分類される: (i) SD の距離が, 許容範囲内に納まる場合の評価概念, (ii) SD がコミュニケーション参与者の許容範囲を超えて拡大している場合の評価概念, そして, (iii) SD がコミュニケーション参与者の許容範囲を超えて縮小している場合の評価概念, である。

ここで注意したいのは, PD と SD は, 通常連動し, 拡大または縮小するものだということである。

たとえば, コミュニケーション相手が, 自分の社会的地位の高さにもかかわらず, 「ひかえめな」行動をとった場合, 人は, 相手に, よりいつそうの親しみを感じことがある。また逆に, ドの相手が, 「生意気な」言動を行なった場合, 相手への親しみの感情が薄れてしまうこともある。

対話相手への親しみの度合いを表わすコミュニケーション行動評価概念は, PD 概念

に他ならない。さらに、「ひかえめな」と「生意気な」は、謙虚さの度合いを表わす日本語のコミュニケーション行動評価概念であり、上述したように、これらは、SD 概念に分類される。

以上のように、PD と SD のそれぞれに関連するコミュニケーション行動評価概念は、互いに密接な相関関係を持っているのである。

しかしながら、PD と SD の連動した縮小・拡大は、本稿では扱わない。これは、将来的研究課題に置くこととし、以下では、PD 概念と SD 概念を、それぞれ、PD の縮小・拡大、SD の縮小・拡大という観点からのみ分析することとする。

4. コミュニケーション行動評価概念の日韓比較

本節では、上で提案した PG のメカニズムが、コミュニケーション行動評価概念の日韓比較に適切にアプライされ、共通点・相違点の抽出に貢献し得ることを示す。

4.1 日韓 PD 概念

第3.4節で指摘したように、PD 概念は、任意の話者が、対話相手との間に想定する PD の距離によって、次の3種類に分類される：(i) PD の距離が、許容範囲内に納まる場合の評価概念、(ii) PD がコミュニケーション参与者の許容範囲を超えて拡大している場合の評価概念、そして、(iii) PD がコミュニケーション参与者の許容範囲を超えて縮小している場合の評価概念である。

(i) のケースには、日本語では、「親しみやすい」「気さくだ」といった評価概念が当てはまり、韓国語では、「스스럼없다」「허물없다」という評価概念が当てはまる^{7), 8)}。また、(ii) のケースには、日本語の「よそよそしい」「そつけない」という評価概念、韓国語の「스스럼다」「서먹서먹하다」という評価概念が当てはまる⁹⁾。

しかしながら、(iii) のケースに当てはまる概念を表わす慣用的な語彙が、「あつかましい」「ずうずうしい」等、日本語には存在するが、韓国語には存在しないということに注目してほしい。

韓国語のネイティヴ・スピーカーによると、あえて、このケースを表わすならば、「예의없다」「버릇없다」という表現を用いるという¹⁰⁾。さらに、これらの表現は、分析的・説明的な表現で、文字通り、「礼儀がない」という意味を持ち、(iii) のケースだけではなく、礼儀を欠く行動一般を表現するものなのだという¹¹⁾。

以上のことを整理すると、日本語と韓国語における PD 概念は、図6のように分布していることになる。

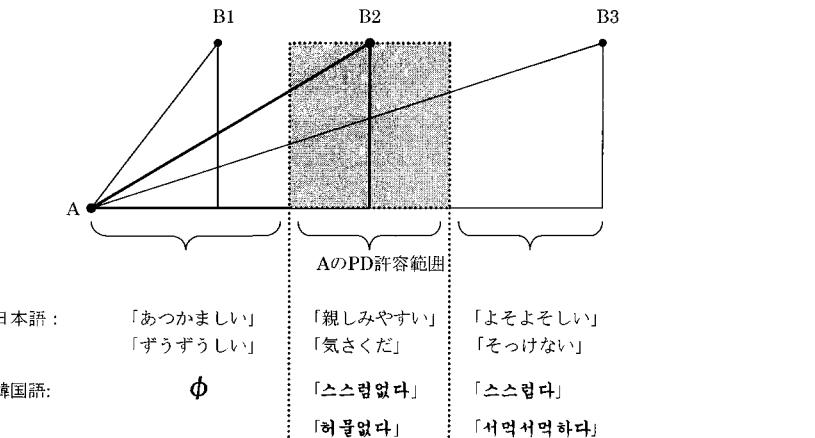


図 6 PD 概念の日韓 PT 分析

さらに、上の議論から、日本語と韓国語のネイティヴ・スピーカーが、親しみのポライトネス具現の背景に持つPTの相違点が、明らかになってくる。

すなわち、日本語のネイティヴ・スピーカーがコミュニケーションの際に想定するPTは、図7のように、3種類に分類される。相手をPD許容範囲内に置くもの、許容範囲を超えてPDが拡大しているもの、そして、許容範囲を超えてPDが縮小しているものである。

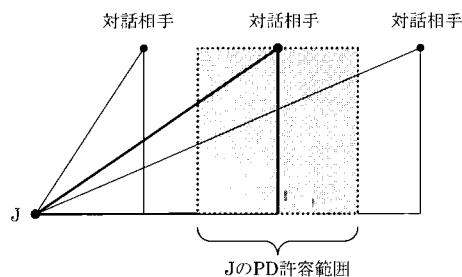


図 7 J の PD 許容範囲

これに対して、図8に示すように、韓国語のネイティヴ・スピーカーのPTでは、PDが、日本語のPDのような区分を呈しておらず、PDの許容範囲が、x軸上限りなくゼロ方向に近づいていると考えられる。その理由は、次のように説明される：上述したように、韓国語には、PDが許容範囲を超えて縮小するケースを特定するための慣用語彙が存在しない。このことを考慮すると、当該ケースは、日常において注目度が低いと推測されるのだ。少なくとも、韓国語では、PDの許容範囲と、許容範囲を超

て PD が縮小するケースとの間に、境界線を引くことが、ほとんど不可能だと分析されるのである¹²⁾。

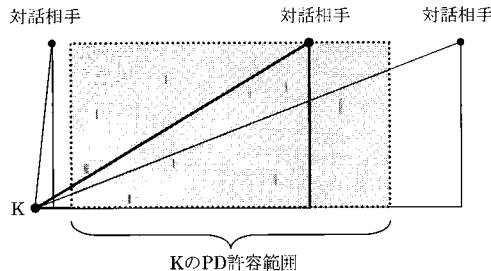


図8 KのPD許容範囲

このような日本語と韓国語のコントラストは、日本語と韓国語のコミュニケーション行動制御定型句 (controlling routine formulae for the communicative behavior)¹³⁾ の違いをも説明する。

日本語には、「親しき仲にも礼儀あり」「親しき中に垣をせよ」「兄弟は他人の始まり」といったコミュニケーション行動制御定型句があるが、本研究のインフォーマントである韓国語のネイティヴ・スピーカーによると、韓国語には、これらの表現に対応するものが見当たらないという。

この違いは、次のように分析できる。すなわち、上述したように、JのPTには、PDの許容範囲と、許容範囲を超えたPD縮小範囲との間に、明確な境界線があるが、KのPTには、これががないのに等しい。上記のコミュニケーション行動制御定型句は、PD縮小範囲の存在を前提とし、それを維持するための表現である。つまり、これらの表現の存在は、JのPTが、本稿で指摘した様相を呈していることの当然の帰結である。一方、上述したように、この範囲に対するKの注目度は低い。したがって、そこを維持するための制御定型句がないことは、予測できるのである。

4.2 日韓SD概念

第3.4節で述べたように、SD概念は、次の3種類に分類される：(i) SDの距離が、許容範囲内に納まる場合の評価概念、(ii) SDがコミュニケーション参与者の許容範囲を超えて拡大している場合の評価概念、そして、(iii) SDがコミュニケーション参与者の許容範囲を超えて縮小している場合の評価概念、である。

日本語の場合、(i)には、「謙虚だ」「慎み深い」「腰が低い」「大人しい」¹⁴⁾等の様々な概念が当てはまる。さらに、同等の概念として、「ひかえめだ」「低姿勢だ」を挙げ

るネイティヴ・スピーカーがいるが、同時に、この二つの概念が、時と場合によって、ネガティブな意味で用いられるという点を指摘するネイティヴ・スピーカーも存在する。よって、そのようなネイティヴ・スピーカーのPGにおいては、この二つの評価概念は、上記(iii)のケースに当てはまる場合があると分析される。

一方、韓国語では、(i)のケースを表わすのに用いられる慣用表現が、「겸손하다」しか存在しない¹⁵⁾。

(ii)のケースに当てはまる評価概念を表わす慣用語彙は、日本語にも韓国語にも豊富にある。たとえば、日本語からは、「生意気だ」「高飛車だ」「偉ぶっている」「人を馬鹿にしている」等が挙げられ、韓国語からは、「고자세다」「거만하다」「오만하다」「건방지다」が挙げられる¹⁶⁾。

(iii)のケースに関しては、日本語には、上述したように、一部のネイティヴ・スピーカーにとっての「ひかえめだ」「低姿勢だ」の他に、「へいこらしている」「へこへこしている」がある。また、韓国語には、「굼실거리다」「저자세다」という慣用表現がある¹⁷⁾。

以上の調査結果は、図9のようにまとめられる。

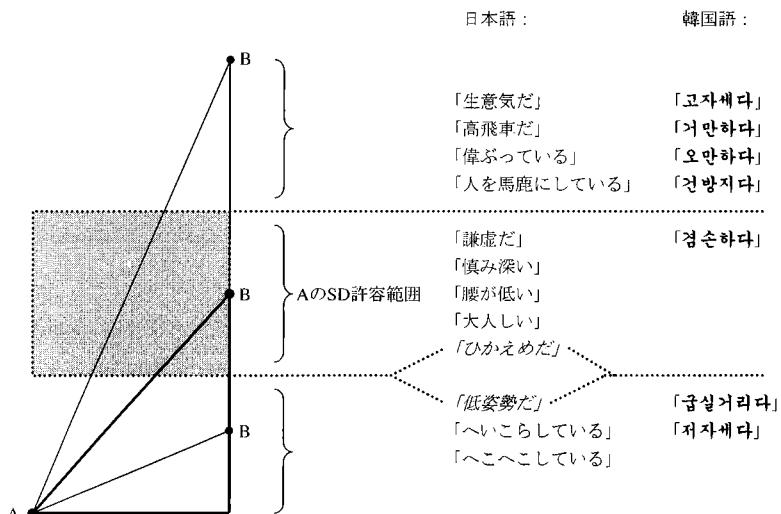


図9 SD概念の日韓PT分析

この図および上の議論から、以下の2点が明らかになってくる。一つは、図10に示すように、JのPGにおいて、SD上の許容範囲が縮小、あるいは拡大する可能性があるということである。そしてもう一つは、図11に表わすように、日本語の場合と対照的に、KのPGにおける、SDの許容範囲の幅が狭いということである。

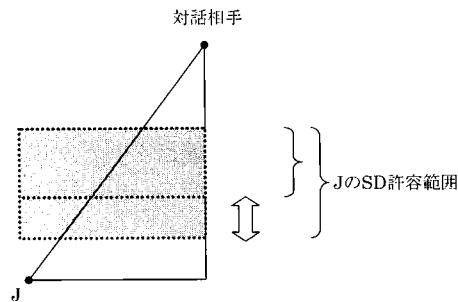


図10 JのSD許容範囲

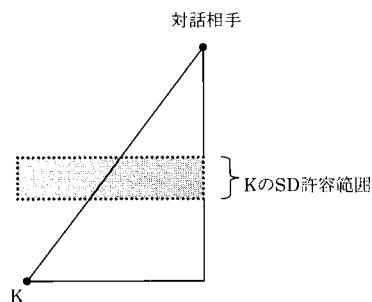


図11 KのSD許容範囲

図10に示した日本語のPGにおけるSD許容範囲の縮小・拡大からは、次のことが指摘される。

まず、ここでの拡大変化は、0（ゼロ）方向に向かったものである。つまり、SDの“階段”をくだって、謙虚さの度合いが高まる方向への拡大である。このことは、日本語における、謙譲表現の存在を説明すると考えられる。なぜならば、謙譲表現とは、自分の社会的立場を低めた形で、物事を提示する言語手段だからだ。

さらに、図11に示したように、KのPGにおいては、SDの許容範囲が狭く、これはまた、縮小も拡大もしない。このことから、KのPGが、円滑なコミュニケーションを行なうためには、參與者に、限定された行動しか許さないように、組み立てられているということが予測できるのだ。

5. おわりに

本稿では、ポライトネスを普遍的に説明するための手段として、ポライトネス・グラマー (PG) を提案した。そして、このモデルを用いて、日本語と韓国語のコミュニケーション行動評価概念を比較し、その相違点を明らかにした。また、この分析により、本 PG モデルの妥当性を示した。

本研究の今後の課題としては、次の四つが挙げられる。

第一に、本稿が分析対象としたのは、日韓におけるコミュニケーション行動評価概念のごく一部にすぎない。よって、本稿が提案した PG モデルの、コミュニケーション行動研究における真の有効性を主張するためには、日本語と韓国語における他の評価概念の分析にも適用可能かどうか、検証する必要がある。さらに、日本語と韓国語以外の言語も対象として、このモデルの説明力について、検証がなされなければならないだろう。

第二に、本稿では、提案した PG モデルが、コミュニケーション行動評価概念の対照を、客観的な方法で可能にするということを示した。しかし、この PG モデルの適用範囲は、それだけにとどまらない。この PG モデルは、ポライトネスに関連する様々なコミュニケーション行動、すなわち、敬語・謙譲語の使用、各種の呼称表現の使用、方言における性向表現 (室山 2004) の使用等の説明に応用できる可能性を持っている。というのは、これらの行動は、まさに、ポライトネスを反映するものであり、よって、その背景には、コミュニケーション参与者同士の、社会的接近距離 (SD) および心理的接近距離 (PD) が多分に関与していることが明らかだからだ。したがって、その検証も、今後の課題として挙げられる。

第三に、第 3.4 節で指摘したように、本稿で提案した PG モデルは、SD と PD の運動変化を説明するものでなければならない。よって、この点に関する研究も、今後発展させて行かなければならない。

最後に、本稿で提案した PG モデルとこれを用いた研究の成果が、言語教育にも適用されることが期待される。言うまでもないことだが、学習者に、ポライトネスに関わる言語使用を理解させ、実践できるような能力を習得させることは、欠かすことできない言語教育の役割だからだ。

注

*本稿では、3名の著者の名を、姓のローマ字表記に基づいて、アルファベット順に記載した。われわれの共同研究は、第一著者という序列意識を必要としないからである。

- 1) Nishijima(1995), Reinelt(1995), Marui et al. (1996) では、この概念を Concepts of Communicative Virtues (CCV) と呼んでいるが、“virtues”には文化的倫理的なバイアスがかかっているので、上位概念としては適切であるとは言えない。そこで、丸井(1996), Nishijima (1996), Yamashita (1996) では、より一般的な表現として “evaluating concept of communicative behavior” を提案している。
- 2) 一般に、「스스럽다」「서먹서먹하다」は、それぞれ、「気兼ねしている」「よそよそしい」という日本語に翻訳される。
- 3) 個別言語の調査研究はある。たとえば、Hermanns (1993), Reinelt (1995), Nishijima (2000) はドイツ語、Nishijima (1995, 1996), Yamashita (1996) は日本語を対象としている。
- 4) 日本語とドイツ語の対照研究としては、Marui et al. (1996) が挙げられる。
- 5) 他のペアでも同様のことが指摘できる。たとえば、「considerate」と「おもいやりのある」が同義として扱われているが、視点に関して差異が認められる。この点に関しては、西嶋(2003)を参照のこと。
- 6)もちろん、その他にも可能な方法はある。たとえば、特定の時代に刊行された複数の語義辞典を用いた意味ネットワークの調査はその一つである。Nishijima (2000) を参照。
- 7) 一般に、「스스럽없다」と「허물없다」は、それぞれ「気兼ねがない」「隔たりがない」という日本語に訳される。
- 8) 第2節で触れたアメリカ英語の「friendly」は、(i) のケースに当てはまる。よって、本稿では、これに相当する日本語の概念は、「親しみやすい」「気さくだ」等であると分析する。
- 9) 「스스럽다」「서먹서먹하다」とは、通常、それぞれ、「気兼ねしている」「よそよそしい」と日本語訳される。
- 10) 「예의없다」は、口上、口下の両者の行動を評価する際に用いる表現である。それに対して、「벼룩없다」は、口下の行動を評価するときのみに用いられる表現である。
- 11) 無論、日本社会と韓国社会における「礼儀」の定義には、異なる部分がある。
- 12) この分析は、韓国社会を支える「정(情)」に結びつくだろう。本稿のインフォーマントである韓国語のネイティヴ・スピーカーによると、口的にコミュニケーションをする間柄になれば、「相手が、心理的に近づいてくるのはあたりまえ」であり、また、「相手を、心理的に近いものと想定し、行動するのはあたりまえ」なのだそうだ。
- 13) 西嶋(2003)を参照。
- 14) この場合の「大人しい」は、性格が大人しいという意味ではなく、行動がひかえめだという意味である。
- 15) 「겸손하다」は、通常、日本語の「へりくだっている」という表現に訳される。
- 16) 「고자세다」「거만하다」「오만하다」「건방지다」は、通常、「高姿勢だ」「驕慢だ」「傲慢だ」「生意気だ」という日本語に、それぞれ訳される。
- 17) 「굽실거리다」と「저자세다」は、一般に、「低姿勢だ」という日本語に訳され、ネガティブな意味を持つとされる。

参考文献

- Brown, P., & Levinson, S. 1987 Politeness: Some universals of language usage. Cambridge: Cambridge UP.
- Eelen, G. 2001 A critique of politeness theories. Manchester: St. Jerome Publishing.
- Hermanns, F. 1993 Mit freundlichen Grüssen. Bemerkungen zum Geltungswandel einer kommunikativen Tugend. In Klein, W. P., & Paul, I. (Eds.), Sprachliche Aufmerksamkeit. Glossen und Marginalien zur Sprache der Gegenwart. Pp.81-85. Heidelberg: Universitätsverlag C.Winter.
- Ide, S. 1988 Introduction Multilingua 7(4), Pp.371-374.
- Ide, S., Hill, B., Carnes, Y. M., Ogino, T., & Kawasaki, A. 1992 The concepts of politeness: An empirical study of American English and Japanese. In Watts, R., Ide, S., & Ehlich, K. (Eds.), Politeness in language: Studies in its history, theory and practice. Pp. 281-297. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- 丸井一郎 1996 相互行為の評価概念 高知大学人文学研究, 4, Pp.219-243.
- Marui, I. 1996 Zusammenstos der Normalitäten interaktiver Kooperation im Japanischen und Deutschen. ドイツ文学論集(日本独文学会中国四国支部編), 29, Pp.58-67.
- Marui, I., Nishijima, Y., Noro, K., Reinelt, R., & Yamashita, H. 1996 Concepts of communicative virtues (CCV) in Japanese and German. In Hellinger, M., & Ammon, U. (Eds.), Contrastive sociolinguistics. Pp. 385-409. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- 室山敏昭 2004 文化言語学序説 一世界観と環境—和泉書院。
- Nishijima, Y. 1995 Über den Bedeutungswandel von "teinei". - Zum internationalen Vergleich der Konzepte von kommunikativen Tugenden -. 論文集刊行委員会(編)好村富士彦教授退官記念論文集. Pp.207-220.
- Nishijima, Y. 1996 Bewertende Konzepte kommunikativen Verhaltens (BKKV) und soziale und kulturelle Verhältnisse. - Ein lexikalischer Ansatz anhand der Beschreibung in Wörterbüchern -. 金沢大学教養部紀要, 3 (2), Pp.155-178.
- Nishijima, Y. 2000 Freundlich und hoflich: Interkulturelle Aspekte des kommunikativen Verhaltens. 言語文化論叢(金沢大学外国語教育研究センター紀要), 4, Pp.185-207.
- 西嶋義憲 2003 “Was kann ich für Sie tun?”は「偉そう」か? 一常用句を利用したコミュニケーション行動の比較—かいろす(「かいろす」の会), 41, Pp.19-36.
- Reinelt, R. 1995 Wie die Höflichkeit ihr Gesicht verlor. 愛媛大学教養部紀要, 28, Pp.131-160.
- Yamashita, H. 1996 Zu bewertenden Konzepten kommunikativen Verhaltens. - am Beispiel des japanischen Anredeverhaltens -. 言語文化研究(大阪大学言語文化部紀要), 22, Pp.273-294.

Politeness Grammar : Analysis of the Evaluating Concepts of Communicative Behavior in Japanese and Korean

**Sang-young NAM, Yoshinori NISHIJIMA,
and
Mariko SAIKI
(Kanazawa University)**

Politeness refers to the behavior one observes in order to make realize the flowing conversation with his or her partner(s). In this paper, it is first pointed out that the background factors of politeness are identified from both psychological and sociological points of view. Based on this, a universal model of grammar is then proposed which is designed to explain various expressions of politeness found among speakers of different languages (*Politeness Grammar*). It is also demonstrated in this paper that this model of grammar analyzes and compares the evaluating concepts of communicative behavior in Japanese and Korean in an objective fashion.

Key words : politeness, social distance, psychological distance, evaluating concept of communicative behavior, normality

専門教育における留学生の日本語 －日本人学生との比較を通じた分析－

古本 裕子・苗田 敏美・松下美知子

I. はじめに

専門教育の場で必要な言語は、研究領域によっては日本語より英語が重視され、日本語は日常会話ができればよいとする指導教員も少なくない（東京工業大学2002）。その一方、専門教育で指導する際の使用言語は日本語が多いことも指摘されている（村岡ら2003）。日本語による専門教育が行われる場合には、留学生の日本語力が問題となる。また、専門教育において、特に「日本語で書く」ことの必要度が低いとされているが、その実態についても把握する必要がある。そこで、筆者らは専門教育の場で留学生の指導に当たっている教員が、留学生の日本語力をどのようにとらえているかを明らかにすることが必要であると考え、指導教員に対し修士課程以上の留学生の日本語を対象に質問紙調査を行った。

本調査の目的は次の3点である。

- (1) 日本語で行う専門教育の指導において指導教員が工夫していること、重要であると認知していることは何か。
- (2) 専門教育を行う際、指導教員は留学生の日本語のどの部分に不満を感じているか。
- (3) 日本語でのレポートや論文など「書く」能力について、指導教員が不満に感じていることは何か。

上記の3点をそれぞれ学生のグループ別に検討する。学生は漢字圏留学生・非漢字圏留学生¹・日本人学生と性質の異なる3つのグループに分けられ、さらにそれが理系学生・文系学生に分けられる。

II. 先行研究

これまで多くの調査から、理工系学部・研究科の専門教育の場で日本語使用は重視

1 漢字圏留学生とは中国、台湾、韓国出身の留学生を指す。非漢字圏留学生とは、それ以外の留学生を指す。

されない傾向が明らかになった。理系では日本語で書くことが求められておらず（都河ら1997：東京大学），東京工業大学（2002）では教員の80%程度が「メールが書ける程度」以下でよいと考えていた。三重大学（1995）の文系も含む調査においても、日本語で「論文を書く」ことが必要だとした教員は41.4%にとどまる。

また、調査が指導教員対象か留学生対象かで調査結果は大きく異なる。九州大学の因ら（1998）が予備教育担当の指導教員を対象に行った調査では、日本語で「論文を書く」ことが必要だとした教員は60%以上であったのに対し、留学生は20%弱と少數であった。

以上のように、これまで日本語のニーズ調査は数多くなされてきたが、結果は必ずしも一致しない。その原因として、それぞれの調査で異なる性質の学生が混在し、その構成比が違っていたことが考えられる。そこで、本研究は理系と文系を分けて分析するだけでなく、非漢字圏・漢字圏の学生、さらに問題を明確にするために、日本人学生との比較も行う。

III. 方法

1. 被調査者

現在、金沢大学の大学院または大学院研究生以上の留学生を担当している指導教員157名に質問紙を送付した。返送されたのはそのうち107通で、回答率68.1%である。大学院または大学院研究生以上の留学生は現在252名であるが、1名の教員が複数名の留学生を指導している場合が多いため、157名の指導教員が対象となった。調査は2004年12月～2005年1月に行った。

2. 調査内容

最初に、以下のような内容について質問紙を作成配布し、郵送により回答を求めた。

- 1 指導教員のプロフィールと指導状況
- 2 日本語を指導する際に工夫・配慮していること（選択数自由）
- 3 専門指導で使う日本語で、特に重要なと思われる項目（専門の研究をする上で必要と思われる、読む・書く・聞く・話すスキルを使った項目の中から、5つまで選択）
- 4 学生を指導するとき、学生（非漢字圏留学生・漢字圏留学生・日本人）の日本語力に満足しているか（満足1～不満4までの4段階から選択）
- 5 日本語を用いる活動のうち、専門の研究を効率的に行う上で学生（非漢字圏留

学生・漢字圏留学生・日本人) の力が特に不足していると思われる項目(5つまで選択)

次に、留学生指導場面における実態を総合的に把握するために、少數の指導教員に面接を実施し、専門の指導時に不可欠な日本語に関する問題点とその対応について尋ねた。

検定は、特に断らない限り Fisher の直接確率法を使用した。

IV. 結果と考察

1. 被調査者について

①所属

回答のあった被調査者の所属は次の表1に示した。
71.0%が理系の教員で、中

研究科	理 系				文 系			
	工学	医学	薬学	理学	文学	法学	経済	教育
計107人	33	27	7	9	9	3	10	9
	76 (71.0%)				31 (29.0%)			

でも工学研究科・医学研究科が多い。

②日本語使用

指導の際の日本語使用率を、0・25・50・75・100%の中から選ぶという方法で聞いた。

指導教員が留学生を指導するとき、日本語使用が50%以下で少ない教員グループと、75%以上と日本語使用が多い教員グループに分け人数を比較した(表2)。文系は理系よりも日本語を多用している教員が多くいた($p < 0.01$)。

理系の日本語使用率は研究科によって差がある。工学研究科は日本語使用率が高く、理学研究科と工学研究科と比べた場合、有意差があった(それぞれ $p < 0.01$, $p < 0.05$)。また薬学研究科も日本語を使用することが多く、理学研究科との差が有意だった($p < 0.05$)。

表1 被調査者の所属

表2 指導教員が留学生を指導するときの日本語使用率

グループ		少ない			多い		
日本語使用率		0%	25%	50%	75%	100%	計
文 系	文 学	0	0	2	2	5	9
	法 学	0	0	1	0	2	3
	経 済	0	1	0	1	8	10
	教 育	0	0	1	2	6	9
	計	5			26		31
理 系	医 学	9	4	5	4	5	27
	薬 学	1	1	0	4	1	7
	理 学	7	0	1	0	1	9
	工 学	3	6	2	10	11	32
	計	39			36		75
全体合計		44			62		106

日本語を100%使用している教員も多い。その割合は、理系でも4分の1、文系では約3分の2に達する。

文系で日本語の必要度が高く、留学生の日本語レベルが高い（古本ら1999）。理系では議論の相手が国内だけでなく海外の場合が多く、むしろ積極的に英語を使おうとしている場合がある。古本ら（1999）の調査では、指導教員が卒論・修論で日本語のみを使うことを希望している割合は、文系で82.4%，理系で43.2%であった。これが、理系・文系の日本語使用の差になっている。金沢大学全体で見ると日本語の使用はかなり多く、日本語の論文指導の必要がある。

2. 指導教員が留学生を指導する際にしている工夫

教員（102人）が留学生を指導する際工夫している項目で最も多かったものは「ゆっくり話す」（70人）で、以下「簡単な日本語を使う」（59人）、「英語を使う」（57人）、「確認を取る」（45人）が続いた（図1）。

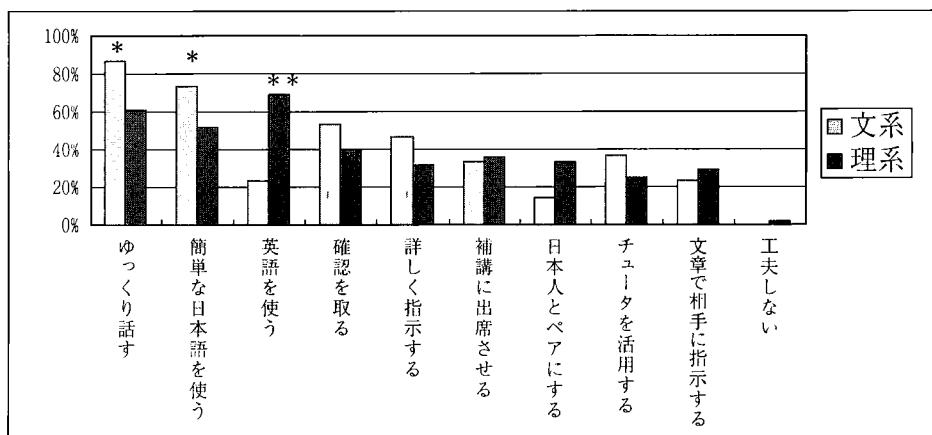


図1 留学生を指導する際に工夫していること（文系・理系の差 * p < 0.05, ** p < 0.01）

文系が理系より多く、有意差があったものは「ゆっくり話す」「簡単な日本語を使う」である。反対に、理系が文系より多いのは、「英語を使う」であった（図1）。

日本語使用が多い教員グループと少ないグループを比較すると、前者は後者より「ゆっくり話す」（p < 0.01）、「簡単な日本語で話す」（p < 0.01）を多く選択した。「詳しく説明する」（p < 0.1）も多く選択する傾向が見られた。「英語を使う」（p < 0.01）は日本語使用が少ない教員で有意に多かった。これらは、文系教員と理系教員との違いとよく似た傾向を示している。

日本語を使用しない教員は英語を使用することで留学生とのコミュニケーションを

成り立たせている。しかし、英語をあまり使わせず、簡単な日本を使い、ゆっくり話す、詳しく説明する、学生に日本語補講を受けさせるなどの工夫をすることで、指導を行っている教員も多かった。

3. 日本語で専門の研究活動をする場合に重要なこと

理系・文系に共通して重要だとされているのは、「発表する」「議論する」である。「論文を読む」「教科書を読む」「論文を書く」「レジュメを書く」は文系のみで重要性が高く、理系とは有意な差が認められる²（図2）。

理系・文系とも研究にとって重要なことは、自分の研究を指導教員をはじめ研究会・学会で同じ専門分野の人に伝える。そして相手からのフィードバックにより、さらに考えを深め、議論する。そのような過程が重視されるのであろう。

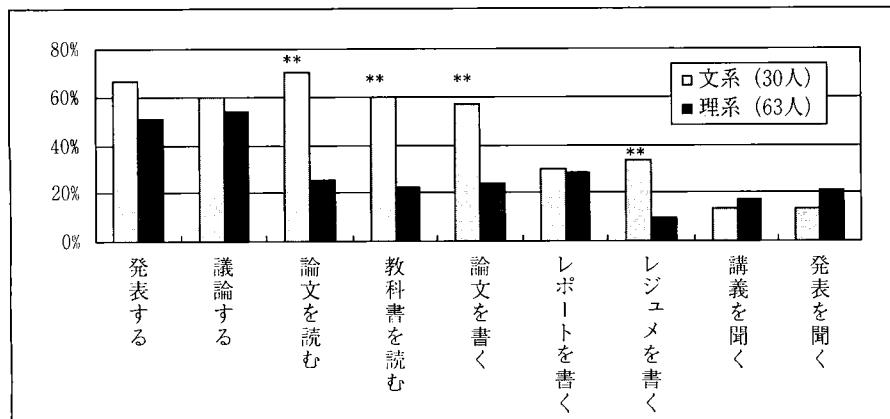


図2 専門の指導をする上で重要な項目（理系・文系の違いによる差 ** p < 0.01）

これに対し「書くこと」の重要度はやや減少する。特に、理系では論文やレポート、レジュメを書くことのいずれも重要視されておらず、先行研究（都河ら1997）と同様の傾向を示している。文系で「論文を書くこと」が重視される傾向は三重大学（1995）の報告にもあり、文系の専門指導に共通のことと推察される。

全体をまとめると「読む」と「書く」について、理系では重視されないが、文系では共に非常に重視されている ($p < 0.01$)。また「聞く」に関係した項目の重要度は確かに比べ文系も理系も低い。これは、本調査の対象となる教員の指導している学生が

2 これらの問い合わせでは、留学生指導の際に日本語を全く使わない教員には回答を求めていない。日本語を使用する文系30名、理系63名の回答を検討の対象とした。

大学院生であり、講義が少ないことが関係していると思われる。

4. 指導教員が学生の日本語力に不満を持っている部分

専門で必要と思われる次の項目について、指導教員が非漢字圏留学生・漢字圏留学生・日本人学生の日本語に満足しているかどうかを尋ねた。「不満」「やや不満」としたものを「不満群」、「満足」「やや満足」としたものを「満足群」と分類し、「不満群」の割合を出した（図3）。

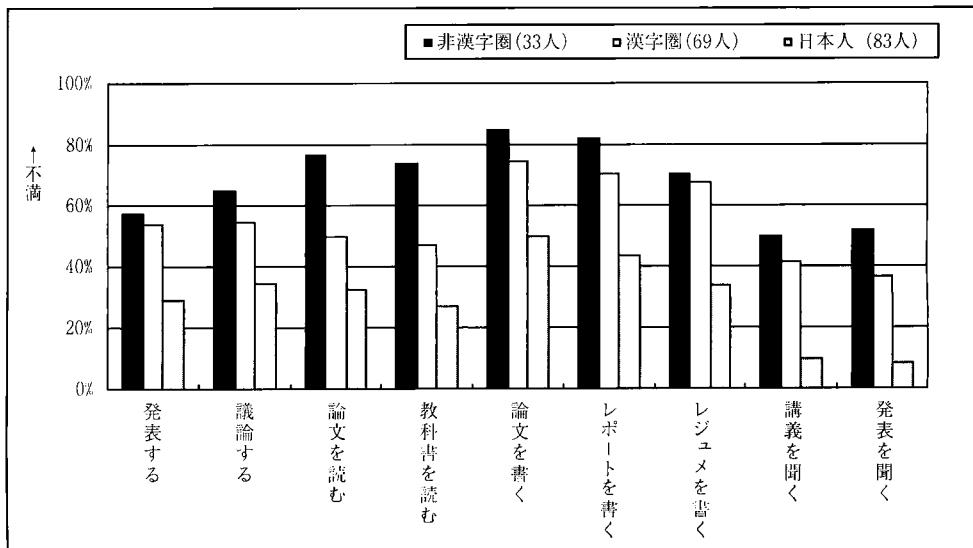


図3 指導教員の学生に対する日本語の「不満群」（「不満」「やや不満」を合わせたもの）の割合（学生のグループ別）

4.1 非漢字圏・漢字圏・日本人の違い

留学生が非漢字圏か漢字圏かで不満の強さが大きく異なった。不満はいずれの項目でも非漢字圏留学生 > 漢字圏留学生 > 日本人学生の順であった（図3）。日本人と非漢字圏留学生、漢字圏留学生とを比べると多くの項目で有意差があり（表3），留学生の日本語力は、日本人と比べて非常に低いと見られていることが分かる。

非漢字圏留学生は、「書く」>「読む」>「話す」>「聞く」の順に不満の値が低くなっている。漢字圏留学生は「書く」>「話す」>「読む」>「聞く」の順である（図3）。

指導教員は留学生全体と日本人のいずれについても「論文を書く」力を一番不満を感じていることが分かる（図3）。指導教員に専門教育で重要なことを聞いた際に、「発表する」や「議論する」が上位であったが（図2），ここでは順位が変わっている。

表3 指導教員が学生の日本語力を不満に思うレベル比較 検定結果

項目 グループ	話す		読む		書く			聞く	
	発表	議論	論文	教科書	論文	レポート	レジュメ	講義	発表
非漢字圏>漢字圏			*	*					
漢字圏>日本人	**	*	*	*	**	**	**	**	**
非漢字圏>日本人	**	**	**	**	**	**	**	**	**

* p < 0.05, ** p < 0.01

日本人学生の日本語力低下が叫ばれているものの、留学生と比較すると明らかに力に差があると指導教員は認知していることが分かる。

4.2 文系と理系における日本語能力に関する不満

文系漢字圏留学生は非漢字圏留学生と比較して「発表する」「議論する」が弱く、「論文を読む」「教科書を読む」に対する不満は非漢字圏でも漢字圏と同じ程度で値はあまり高くない(図4)。これに対し、「論文を書く」「レポートを書く」力に対しては、非漢字圏・漢字圏どちらについても60%以上の教員が不満と回答している。

理系では非漢字圏留学生に対する評価が全体的に非常に低く、漢字圏留学生と比べてみると、「論文を書く」($p < 0.05$)、「レポートを書く」「レジュメを書く」(以上 $p < 0.01$) の全てにおいて有意差があった³(図5)。一方、漢字圏留学生は「書く」力が不足していると見られている。

日本人学生について見ると、「論文を書く」は、理系・文系ともに約50%の教員から不満とされている点は注目される。

4.3 日本語使用の頻度差による不満度の違い

日本語使用が多い教員(75%以上日本語を使う)と日本語使用が少ない教員(日本語使用が50%以下)の不満の強さの差を見たが(表4)、「論文を書く」については、どちらのグループでも不満とする率が高く、有意差がなかった。

3 他に「発表する」「論文を読む」「教科書を読む」は $p < 0.01$ で、「講義を聞く」は $p < 0.05$ で有意な差が見られた。

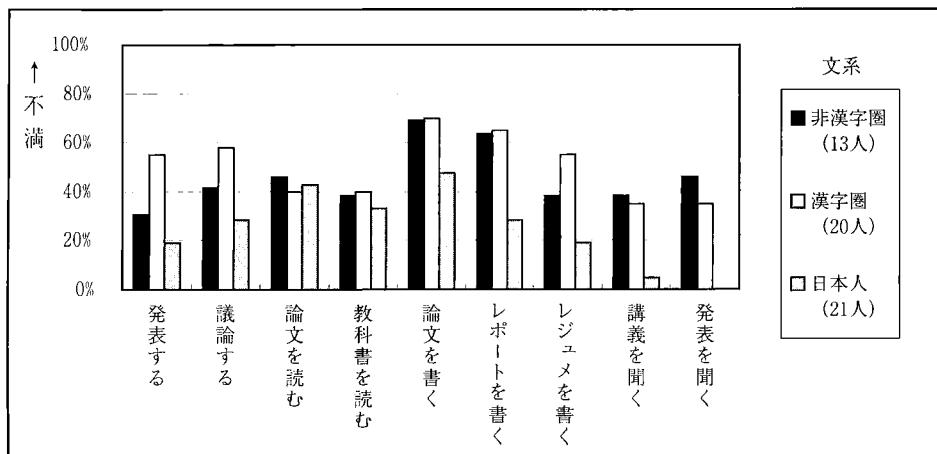


図4 文系の指導教員が学生の日本語力を「不満」とした割合

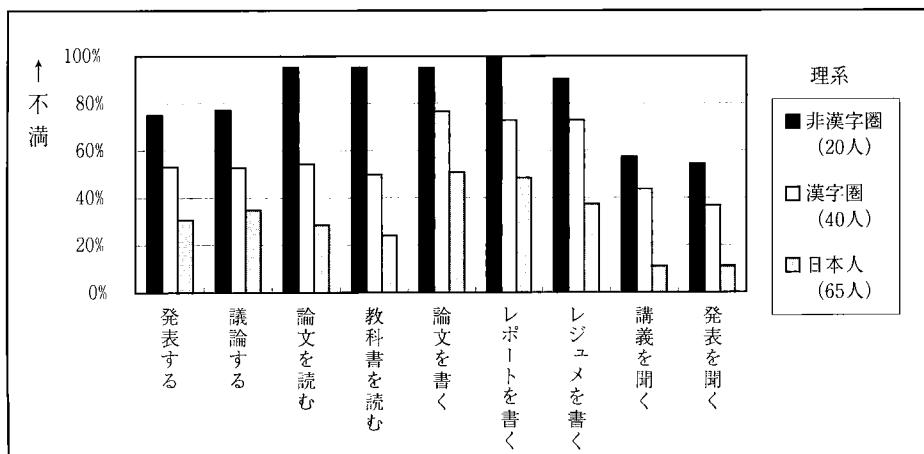


図5 理系の指導教員が学生の日本語力を「不満」とした割合

ここで有意な結果が出たのは、全て、日本語使用が少ない教員の不満のほうが日本語使用が多い教員より高い値である場合である。指導教員が留学生の日本語に対して不満を持っているため、日本語を使用する頻度が低くなっていることが考えられる。

しかし、日本人に対する評価も、日本語使用が少ない教員の不満が強い。「講義を聞く」「発表を聞く」の項目で有意差が出ており、また「発表する」「議論する」の項目でも同じ傾向があった。これは、日本人によっても日本語力に差があり、それが教員の不満となって表れていることが考えられる。他に、日本語使用が少ない教員は学生の日本語に対する評価が厳しい傾向があるということも考えられる。これらは、さら

表4 教員の日本語使用頻度別不満度の差

グループ	発表する	議論する	論文を読む	教科書を読む	論文を書く	レポートを書く	レジュメを書く	講義を聞く	発表を聞く	日本語使用少:多(人)
非漢字圏	*	*	*	**			*	*	*	5:29
漢字圏		*				**	**	*	*	12:56
日本人								*	*	27:57

注) (マンホイットニーのU検定 * p < 0.05, ** p < 0.01)

に検討する必要がある。

専門の研究をする上で重要な項目(図2)と教員が不満に思っている項目(図3)との間には、この調査では有意な関係を見出すことができなかつた。調査方法を変えることで、その関係についてさらに調べる必要がある。

5. 書けないことに関する分析

指導教員は非漢字圏・漢字圏留学生・日本人学生について、論文を書く力が不足していると感じている割合が高い。そこで、論文を書くときに必要とされる技術のうち、具体的にはどのような点が不足しているのかを検討した。

漢字圏留学生に対して不満度が高いのは、文法>論理の組み立て>書き言葉=専門用語の順である(表5)。非漢字圏留学生は、専門用語>文法>書き言葉>漢字の読み書きの順だった。比較のために日本人を見ると、論理の組み立て>論文の形式>書き言葉の順となっている。

いずれのグループの学生にも共通してできないのは論文に必要な「書き言葉」である。

非漢字圏・漢字圏留学生に共通する不満で多いのは、専門用語を知らない、文法的

表5 「書く」力のどんな点が不足しているか*(全体)

グループ	人数	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位
非漢字圏	35	専門用語	文法	書き言葉	漢字	論理組立	論文形式	段落構成
		62.9%	54.3%	48.6%	45.7%	31.4%	22.9%	11.4%
漢字圏	70	文法	論理組立	書き言葉	専門用語	論文形式	段落構成	漢字
		64.3%	55.7%	51.4%		28.6%	17.1%	15.7%
日本人	79	論理組立	論文形式	書き言葉	専門用語	文法	段落構成	漢字
		82.3%	57.0%	43.0%	30.4%	30.4%	30.4%	6.3%

* 調査項目を細分化し、5つ以内で不足している点を選択し、主な項目について多い順に並べた。

表6 「書く」力のどんな点が不足しているか*（文系・理系別）

グループ	人数	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位
非漢字圏	文系	専門用語	漢字	文法	書き言葉	論理組立	論文形式	段落構成
	理系	専門用語	文法	書き言葉	漢字	論文形式	論理組立	段落構成
漢字圏	文系	論理組立	文法	専門用語	書き言葉	論文形式	段落構成	漢字
	理系	文法	書き言葉	論理組立	専門用語	論文形式	漢字	段落構成
日本人	文系	論理組立	論文形式	専門用語	段落構成	書き言葉	文法	漢字
	理系	論理組立	論文形式	書き言葉	文法	段落構成	専門用語	漢字

* 調査項目を細分化し、5つ以内で不足している点を選択し、主な項目について多い順に並べた。

に正しく書けないというもので、これらは日本人学生との間に有意差があった（非漢字圏留学生と日本人学生の文法との差は $p < 0.05$ 、それ以外は $p < 0.01$ ）。非漢字圏留学生は、特に漢字の読み書きができない（日本人学生との間に有意差 $p < 0.01$ ）。指導教員はどのグループの学生も「書く」力に不満があったが（図3）、この結果より、学生のグループによって不足している力の性質が違うことが分かった。

不足しているのは、「文法」や「漢字の読み書き」といった從来から日本語教育の場で指導されてきたものだけではない、「専門用語」や論文などに使用される「書き言葉」である。

「論理の組み立て」ができないということが特に注目される。日本人学生については実に80%の教員が、漢字圏留学生は半数以上の教員が指摘している。しかし、非漢字圏留学生については不満の順位が低い。

「論理の組み立て」とは、自分の主張することを相手に順序よく、効果的に分からせる方法のことである。日本人は大学に入るまで、このような内容を学習する機会がない。できないのであればこれらを教育する必要がある。

6. 指導教員に対する面接調査

これまでの結果より、専門教育の場で日本語教師の提供すべき指導の内容が明確にされたが、これらのスキルは近年日本語教育の場で議論がなされてきているものである（深尾1999）。

指導教員に対する面接の結果、文系（文学）の教員は、「留学生は日本語でレポート、論文を書くのが苦手である。論文を書かせると、話し言葉で書く。レジュメを作つて発表するが、論文としての表現や文章を書くことができない。日本人学生に指導を頼んだがうまくいかなかつた。留学生が論文の構成、順序を考えて書いているのに、

それを日本人の学生が分からなかつたのではないか。教えるには技術がいると思う」と述べている。

理系（工学）の教員は「英語で研究しているので日本語は日常会話レベルができればいい」としながらも、「授業は日本語なので、日本人学生とのディスカッションの際に問題が生じる。論文発表前のレジュメは日本語なので、留学生は情報収集が困難である。したがって、研究の最先端で何が起きているか知ることができない。留学生は専門教育の場で日本語ができない不利益を感じている」と述べている。

さらに、理系（理学）の教員は、「留学生は英語で論文を書いている。しかし、彼らは日本人学生がゼミで発表する内容が分からぬ。留学生は学習能力が高いので、指導すれば専門で使える日本語が得できるに違ひない。もしそれを日本語教師にやつてもらえば、彼らの日本語力は格段に上がる」と述べた。

これらの結果より、専門教育の場では文系だけでなく、日本語は必要ないと認識されている理系においても、直接・間接に日本語が使用されていることが分かつた。しかし、留学生はそれに関する教育的対応を受けられずにいることが問題であり、その解決のための日本語教育の必要性は十分にあるといえる。

また、日本人学生に対する不満の高かつた「論理の構成」については、「論理の構成とは主張を述べるための全体の構成のこと、自分の主張をどう組み立てたら分かつてもらえるかを考えることである。非漢字圏留学生には日本語ができなくても、論理の組み立てがよくできる人がいる」（文系・文学 前述）。あるいは、「理系では、『はじめに・方法・結果・考察・文献』という型に納めたら、論文作成ができるようになっている。しかし、日本人学生は『結果』と『考察』がかみあっていないことがある」（理系・理学 前述）との回答を得た。「論理の組み立て」の内容は様々であり、さらに調査・研究の必要がある。

V. まとめと今後の課題

本研究は、総合大学の専門教員に対し、専門教育の場で日本語のどのような項目が重視されているか、学生の日本語のどの部分に不満があるかを調査した。

最初に、留学生を指導する際には、日本語を使用している割合が多いことが確認された。次に、指導教員が留学生を指導する際には、「ゆっくり話す」、「簡単な日本語を使う」などが、文系、および日本語をよく使う教員に使われている工夫であった。理系教員は「英語を使う」ことが多く、前に挙げられたような日本を使って指導する工夫はなされていないことが多かつた。

理系・文系に共通して、重要だとされていることは、「発表する」「議論する」であり、文系では「教科書を読む」「論文を書く」ことも重視されている。

留学生の日本語力に対する不満は、日本人学生と比べて非常に強かった。特に「書く」ことに対する不満は強い。学生のグループによる差は、理系・文系の差よりも、漢字圏と非漢字圏留学生の差が大きく、すべての項目で非漢字圏>漢字圏>日本人の順に不満の値が高くなっていた。漢字圏留学生が弱いのは「書く」ことについての項目であり、非漢字圏留学生は、漢字圏留学生よりもさらに「書く」ことが弱く、「読む」ことも弱いことが分かった。

特に指導教員の不満傾向がはっきりした「書く」ことについて詳細に検討すると、グループ別の特徴が明らかになった。非漢字圏・漢字圏留学生に共通する不満で多いのは、論文に必要な「書き言葉」や「専門用語」を知らない、「文法的に正しく」書けないというものだった。非漢字圏留学生は、それに加えて「漢字の読み書き」ができない。また、日本人学生に対する不満は、「論理の組み立て」ができないというものが顕著であった。

面接調査においても、英語で論文を書く留学生でさえ専門の研究をする上で日本語が分からず不利益を被っていることや、それらへの対処が十分になされているとはいえないことが分かった。

したがって、今回の調査のように、留学生の日本語の不十分なところを適切に見つけ出すことが急務であり、一つ一つのスキルについての知識や教材開発を継続的に行う必要がある。また、日本語教育で可能な支援を、専門教員に対して積極的に提案していくことも必要である。

参考文献

- (1) 大阪大学工学部留学生相談室 (1999)『専門日本語教育教材作成に向けて 大阪大学工学部教官の認識に関する調査』大阪大学工学部国際交流委員会
- (2) 島弘子・八重澤美知子・桜田千采・岡澤孝雄 (1998)『『やさしい日本語』に関する日本人の意識』『金沢大学留学生センター紀要』第1号 27-47
- (3) 因京子・栗山昌子・上垣康与・吉川裕子 (1998)『大学院レベルの日本語予備教育に求められるもの－日本語の到達度は何を示すのか－』『日本語教育』日本語教育学会 12-22
- (4) 東京工業大学国際室・留学生センター・教育工学開発センター (2002)『留学生満足度調査（教員用）結果』<http://www.ryu.titech.ac.jp/info/result/supervisor.pdf>
- (5) 都河明子・五所恵実子・中村久美子・坂田奈緒子・杉浦まそみ子・武田純子 (1997)『理学系大学院における日本語ニーズについて－留学生および指導教員に対するアンケート調査報告』『留学生教育』留学生教育学会 1-26
- (6) 深尾百合子 (1999)『『専門日本語教育』研究に期待するもの』『専門日本語教育研究』No.1 6-9

- (7) 古本裕子・早川幸子・島弘子・三浦香苗 (1999) 「専門教育における留学生の口頭発表(2)」『金沢大学留学生センター紀要』第2号 28-48
- (8) 三重大学 (1995) 『留学生の専門指導における教育改善に向けて－1994年度実施学内アンケート報告集』三重大学
- (9) 村岡貴子・仁科喜久子・深尾百合子・因京子・大谷晋也 (2003) 「理系分野における留学生の学位論文使用言語」『専門日本語教育研究』No.5 55-59
- (10) 米田由喜代 (1999) 「工学系研究留学生の研究活動上の使用言語について－教官へのアンケート調査から－」『専門日本語教育教材作成に向けて 大阪大学工学部教官の認識に関する調査』大阪大学工学部留学生相談室 3-24

Japanese Used by International Students for Academic Purposes

— A Comparison between International Students and Japanese Students —

Yuko Furumoto, Toshimi Noda and Michiko Matsushita

We study here subjects on Japanese usage to which university teachers attach importance. Questionnaires are sent out to teachers at Kanazawa University, asking them what kinds of Japanese skills are important for academic purposes, what degree of Japanese skill is expected for international students, and whether teachers are satisfied with students' skills. The results obtained are as follows: Teachers in the human sciences use Japanese when they teach international students, and they communicate with the students by using simple and slow spoken Japanese. Teachers of science courses use English more than human science teachers. International students need to learn Japanese to participate in discussions with their teachers or other students and to present their papers. Furthermore, students of human science courses need to read textbooks written in Japanese and to write papers in Japanese. Teachers are more dissatisfied with the Japanese writing ability of international students than that of Japanese students. In particular, they complain that international students often write papers in a conversational manner rather than in a written styles, that they rarely use technical terms and that there are often many grammatical mistakes in their papers. On the other hand, they complain that Japanese students have weak logical minds.

Japanese Education in No.1 and No.2 Korean-Chinese Middle Schools in Shenyang City, PR. China: its Now and Future

Keywords : comparative Japanese education, Korean-Chinese student, pilot study

Yan Cui

1. Introduction

With the development of cultural exchange between China and Japan, more and more Chinese students have passed the entrance examinations to Japanese universities and registered as international students in Japan. For example, Kanazawa University lying in Ishikawa Prefecture has accepted more students from China than those from any other countries in recent years.

Among them are Korean-Chinese students who are bilingual, with both Korean and Chinese being their native languages, and whose first foreign language is Japanese. Most of them speak good Japanese. Generally speaking, the courses of foreign languages being offered in Chinese schools (from elementary schools to universities) are divided into two groups: the major group and the minor group. Only the English language belongs to the major group, which means that English course is a required subject in almost every school. The Japanese and the Russian languages belong to the minor group. That is to say, Japanese and Russian courses are compulsory subjects in only a few schools in one city. Furthermore, the number of such schools in which Japanese and Russian are offered is restricted. The courses of other foreign languages are offered in only a few universities as compulsory subjects or elective subjects.

Because of the rapid development of import and export between China and Japan in recent years, the fact is that the number of Japanese-learning students is far more than the number of Russian-learning students. For example, the College of Foreign Languages at Shenyang University accepted 18 Japanese-majors in 2004, while they accepted only 6 Russian-majors.

In order to show the present situation in which Korean-Chinese students learn the Japanese language in China, the author conducted a pilot study in the No.1 Korean-Chinese Middle School and the No.2 Korean-Chinese Middle School in Shenyang City in March, 2005. The

study, by using a questionnaire, attempted to show the change in the number of students learning Japanese from the year 2000 to the year 2004. The 6 questions on the questionnaire were intended to determine the students' attitude towards learning the Japanese language. Based on the analysis of this pilot study, a prospect on learning Japanese in Korean-Chinese middle schools became clear. Finally, the pilot study also aimed at helping the teachers in Japan in teaching Korean-Chinese students in Japan.

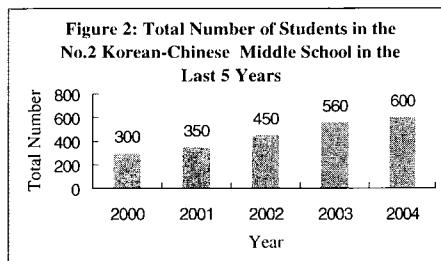
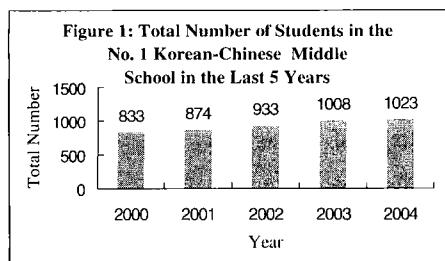
2. Research on the Numbers of Japanese-learning Students in the No.1 and the No.2 Korean-Chinese Middle Schools, Shenyang

The No.1 Korean-Chinese Middle School, with a history of 57 years, is under the direct leadership of the Education Committee of Liaoning Province, while the No.2 Korean-Chinese Middle School, with a history of 50 years, is under the leadership of the Education Committee of Shenyang Municipal Government. Japanese and English courses are offered in the two middle schools. Table 1 shows the number of registered students in the two middle schools in 2004.

Table 1: The Registered Number od Students in 2004

Name of School	Number of English-learning Students	Number of Japanese-learning Students	Total Number
No.1 Korean-Chinese Middle School	678	345	1023
No.2 Korean-Chinese Middle School	240	360	600

Figure 1 and Figure 2 show the increase in the number of students in the No.1 and the No.2 Korean-Chinese Middle Schools in the 5 year span, from 2000 to2004.



Due to the baby boom in the early 1980s, most of the Chinese junior and senior middle schools have been accepting many more students in recent years than before. Figure 1 and Figure 2 show this increase in the number of students. This increase is expected to last for another 20 to 30 years (Huasheng Newspaper, 2004). Figure 3 illustrates the change in the number of Japanese-learning students in the last 5 years.

Figure 3: The Number of Japanese-learning Students in the No.1 Korean-Chinese Middle School in the Last 5 Years

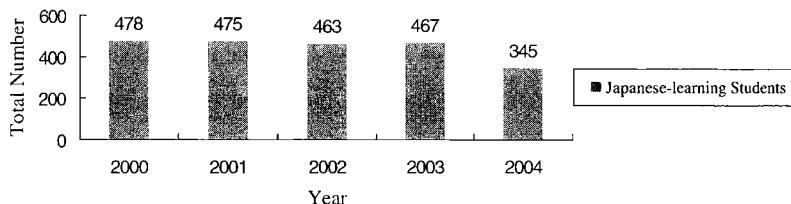
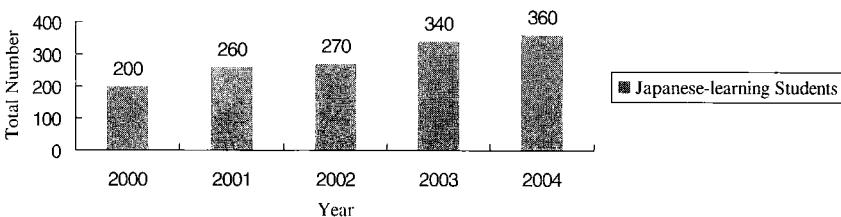


Figure 3 shows that there was a gradual decrease in the number of Japanese-learning students in the last 5 years. The author supposes that this change has been caused by the wide use of the English language in the world (Thomas, 2005), in addition to the spread of English education in China after English was admitted as a subject at the primary schools in 2001 (Fusheng Xiahou & Yongchen Teng, 2003).

Figure 4 illustrates that the number of Japanese-learning students has gradually increased in the No. 2 Korean-Chinese Middle School in the past 5 years.

Figure 4: The Number of Japanese-learning Students in the No.2 Korean-Chinese Middle School in the Last 5 Years



3. Questionnaire: Japanese Language Education in No.1 Korean-Chinese Middle School in Shenyang City of Liaoning Province, PR. China

In order to do further research on Japanese education in the No.1 Korean-Chinese Middle

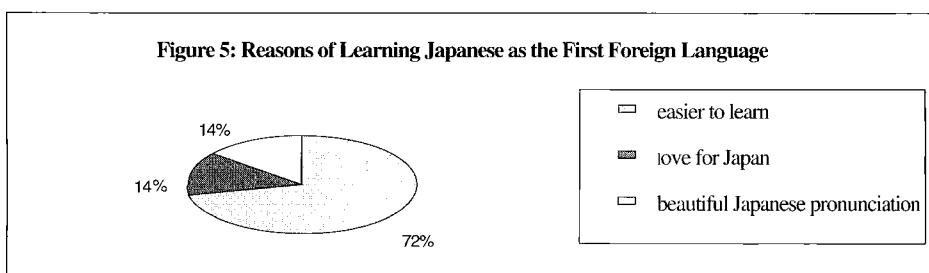
School, a study utilizing a questionnaire was conducted with the aim of analyzing the students' attitude towards learning Japanese. This questionnaire is composed of 6 questions shown in section 4 of this paper, and they were answered by 10 third-grade students in the school.

4. Analysis of the Answers to the Questionnaire

(1) *Which language would you like to learn, Japanese or English, and why?*

This question aims to show the reasons for learning Japanese or English.

Among the 10 subjects, 2 answered that they are interested in learning English because English is more important than Japanese. 1 of the 10 subjects said that he or she likes neither Japanese nor English, because English is extremely hard to learn and Japanese is not a widely acknowledged foreign language. 5 subjects answered that they like Japanese because Korean, which is their other native language along with Chinese, and Japanese share a lot of commonalities in phonetics and syntax, and thus, it would be easier for them to learn Japanese than English. Figure 5 shows the reasons for learning Japanese as their first foreign language which were pointed out by 7 subjects.



(2) *Do you think it is easy or hard to learn Japanese, and why?*

This question aims to find out how the subjects feel about learning Japanese. The hypothesis is that if it is felt to be hard, learning Japanese will not arouse the subjects' interest.

40% (4 subjects) of the subjects answered that they regard Japanese as a difficult language because of cultural differences and the difficulty of the grammar of Japanese. It was also discovered that 30% (3 subjects) consider Japanese as a moderate or partly difficult language. The last 30% (3 subjects out of 10 subjects) stated that learning Japanese is easy since the

Japanese language is similar to Korean.

(3) Among 5 basic skills in learning Japanese, that is, listening, speaking, reading, writing and translating or interpreting, which one are you good at, and why? What skill do you think will play an important role in your future study or work, and why?

This question was asked to see which skill(s) should be emphasized in teaching Japanese as well as which skill(s) has/have more practical value than the others.

With regard to the first question, 7 out of the 10 subjects answered that they are good at reading and writing, because they have been doing a lot of exercises in class. To the same question, 2 subjects answered that they are good at listening since they have been listening to Japanese tapes and watching Japanese TV dramas. 1 subject answered that he/she likes speaking. Furthermore, 90% of the 10 subjects answered that they regard listening and speaking as the most necessary and important skill for the future social demands, since to acquire the oral communication skill is the most important purpose of learning a foreign language. In addition, 1 subject regarded that translation or interpretation will play a very important role in business society.

The above answers also suggest that the reading materials in Japanese classes should have a focus on the audio-video content in order to cater for students' needs.

(4) What kind of Japanese textbooks do you prefer, and why?

This question was asked with the intention to find out what types of textbooks would be welcomed by learners of Japanese.

80% of the total subjects answered that they like to use skill-oriented textbooks. Furthermore, 2 subjects said that they like to use the textbooks, which are directly imported from Japan because there are plenty of frequently-used vocabulary as well as drills in the textbooks. It is heart-warming to see that in recent years, students have direct access to purchasing a Chinese-versioned Japanese textbook at the bookstores, such as *Minna No Nihongo* and *Shin Kiso Nihongo*.

(5) Do you think some of the present Japanese teaching methods need improvement? If "Yes", please write down specifically what method(s) is/are necessary.

This question helps to discover whether or not some of the latest teaching methods should be adopted in the classroom setting, in order to meet the demands of the Japanese learners.

Figure 6 shows the results.

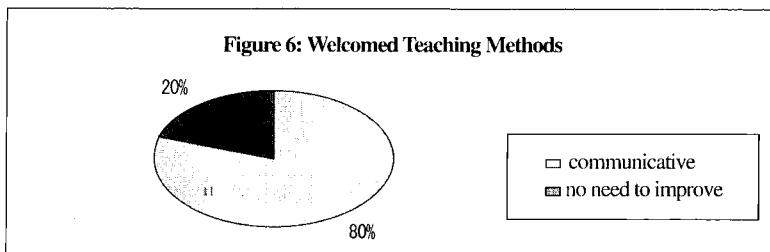


Figure 6 suggests that communicative teaching method is welcomed by most of the subjects. The communicative method emphasizes the cultivation of listening and speaking skills. 2 subjects answered that they are satisfied with the present teaching method, because their Chinese teachers are good enough and they have enough time to speak with native Japanese teachers for the purpose of improving their oral communication command.

(6) Which language will have more influence in the future, Japanese or English, and why?

Question 6 attempts to illustrate the prospect of Japanese language learning and teaching. 3 of 10 subjects regard English as the most widely used language with a very broad prospect both at the present and in the future.

3 subjects mentioned that Japanese has much more advantages than English for the future. Simultaneously, they gave a different opinion on English as follows: English has lost its competitiveness because most educated people in the world can speak English and thus English is no longer a foreign language but a global language. On the contrary, Japanese will be more influential because the number of Japanese learners is comparatively less than the number of English learners. The other 4 subjects argued that there will be no great difference in competitiveness between Japanese and English because both of the two languages are very important in business.

5. Conclusion

Based on the analysis of the number of Japanese learners in the No.1 and the No.2 Korean-Chinese middle schools in Shenyang and the questionnaire conducted in the No.1 Korean-Chinese middle school, it is clear that Japanese education in Korean-Chinese schools in Shenyang has been developing. According to the analysis of the questionnaire, Japanese is

welcomed by the students besides English, because it is being well used in business. Additionally, it became obvious that basic Japanese knowledge should be emphasized, and teaching methods for arousing interest are indispensable in Japanese education for the Korean-Chinese students. As a final remark, the author hopes that the data and the analysis presented in this paper will contribute to the Japanese education for Korean-Chinese students enrolled in Japanese universities.

(Shenyang University, PR. China and Kanazawa University, Japan)

References

- Fusheng Xiahou & Yongchen Teng. (2003). *Lun Wo Guo Xiao Xue Ying YU Ke Tang Jiao Xue Zhi Zou Xiang — Xiang Gang Xiao Xue Jiao Xue Qi Shi. [Foreign Language Teaching & Research in Basic Education, Vol. 2].* (Retrieved June 1, 2005 from <http://www.tefl-china.net/2003/ca13447.htm>)
- Thomas. (2005). English is Used in 63 Countries as an Official Language. (Retrieved June 1, 2005 from <http://www.malta-visa.net/maltacom/ReadNews.asp?NewsID=20>)
- Wuhan Zhongda online GIS Technology co., ltd. (Retrieved March 27, 2005 from <http://www.zdxx.net/mid-school/ln/htm/a2.htm>.)
- 2030 Nian Zhong Guo Ren Kou Jiang Da Dao Feng Zhi — Ren Kou Zong Shu Jiang Chao 14.5 Yi. Huasheng Newspaper, January 5, 2004. (Retrieved June 1, 2005 from http://news.yninfo.com/guonei/yaowen/2004/1/1073279975_5/)
- 「学校概況」2005年3月2日 (検索 <http://www.sc2z.com/xxgk/xuexiaojianjie.htm>)
- 「中国少数民族双語教育実験調査与思考」『民族教育研究』1995年4月, 2005年4月15日 (検索 <http://ethnic.eastedu.org/ziliaoku/2002/20020820-07.htm>)
- 金沢大学総務部企画広報室編集 『金沢大学概要 2000年—2004年』

中国瀋陽市第一・第二朝鮮族中学校における 日本語教育－現状と展望

瀋陽大学外国語学院 崔 岩

要 旨

日中國際交流の進展により、日本の大学へ留学する中国人学生が増加しつつある。金沢大学にあっても例外ではない。その大半の学生は、中国籍朝鮮族であり、中国語と朝鮮語の両者を母語とし、彼らの第一外国語は日本語である。中国では、外国语は

小学校から教え始め大学まで教えるが、その必修言語は英語である。また、教える学校が少ない事もあるが、一部を除き、日本語とロシア語のみが選択科目か必修科目として開講されている。他の外国語は、一部の大学で教えられているだけである。

近年、日中貿易が急速に進展しつつある。それに伴い、ロシア語よりも日本語を学ぶ学生が増加しつつある。例えば、瀋陽大学では、2004年度に日本語を専攻した学生の数は18名であったのに対し、ロシア語を専攻した学生の数は6人であった。

このような背景下で、著者は、2005年3月、瀋陽市朝鮮族第一中学校と同第二中学校における日本語教育の現状を調査した。本論文では、2000年から2004年までの日本語学習者数の変遷とその学ぶ目的、及び今後の動向について報告する。本論文は、将来の中国籍朝鮮族学生への日本語教育に資するものである。

キーワード：比較日本語教育、中国籍朝鮮族学生、調査研究

日本武道に見られる思想の研究（その4） －日本武道における「礼」の一考察－

ピットマン ハイコ

はじめに

現在、国際的に幅広く普及を果たしている日本武道ではあるが、全く文化環境の異なるそれぞれの国々の修行者からすれば、容易には理解しがたいいくつかの壁を有していることも事実である。その一つが「礼」をめぐる問題である。伝統的な日本武道の一つを修行すると、多くの場合、遅かれ早かれ、その中に存在する「礼法」即ち「礼儀作法」と直面することになる。例えば、「先生に礼」あるいは「お互いに礼」といったこと自体にとまどう人々もいる。特に初心者の段階では、「礼」は“体を曲げる儀式”であり、握手などといった“挨拶の仕方”に慣れ親しんできた場合には、かなり異質なものとして目に映るかもしれない。また、それぞれの宗教的立場から、「礼」をきちんと説明をしないまま、“人に礼を行う”時には、これを拒む人もいると見聞したことがある。

筆者は、留学生を含む多くの人々と一緒に武道をやる機会があるが、なぜ「礼をする」のか、なぜ「礼法」即ち「礼儀作法」は、日本武道を修行することに欠かせないのか、という質問に対しては、なかなか明確に答えにくいと感じている。また、一般に指導者が、「礼」についてあまり具体的な説明をしないことが多いのも現状であると思う。しかし、日本武道の修行にとって「礼」は本質的なものであり、またそのことの意味と重要性を明確に説明することが不可欠だと考えている。

武道文献には、「礼に始まり、礼に終わる」という格言をしばしば見かける。だが、最近の武道の試合を見ていると、形式的な「礼」に終わっている場合が多く、しかも形さえ崩れて、「礼を正しく行う」意識はきわめて希薄であるようにすら見える。またしばしば試合終了時に勝者によるガッツポーズがごく当たり前のように行われているのも見かける。

そこで今回は、なぜ「礼」をするのか、なぜ「礼」は武道にとって大切なのか、という観点から「礼」の意味を追求してみたい。

「礼」の概念試論

空手道を例にあげてみよう。例えば、松濤館流の父と言われている富名腰（船越）義珍の『空手二十箇條』は、その第一条が、「礼」を強調する「空手は礼に始まり礼に終る事を忘るな」から始められている¹。また、この格言は流派を超えて、その類似的な言い方を含めて、さまざまな空手道文献に見られる（Bittmann, 1999, 294頁を参照）。

さて、この「礼」という概念はいったいどのような意味を持っているのであろうか。まず、その基本的な意味合いについて、岸野雄三は次のように述べている。

「礼は旧字体で禮と書く。許慎の『説文解字』によれば、礼は履の意味であり、人として踏み行う道であり習慣である。礼は『示』と『豊』とからなり、神を表す『示』と、祭器を表す『豊』とから作られている。したがって、元来、『礼』は祭祀と深く関係し、神に仕え、神を祭るために踏み行うべき道であったと言えよう。…このように礼は宗教的儀礼から出発し、次第に洗練されて社会的規範に発展するが、他方では強制と制裁が伴う法律とは一線が画されている」（岸野, 1991, 3頁）。つまり、「礼」とは押しつけや強制が伴う法律でもなく、宗教的な深さに淵源する人間の踏み行う道が習慣化されたものである。

日本における礼法を歴史的に見ると、武家政権の時代以前から中国古典礼書の影響を受けてきたが（山根, 2004, 57頁），武道の「礼」はもとより、今日に至る日常の礼儀作法に深くかかわってきたのは小笠原流であった。小笠原家は足利将軍家の弓馬術師範とされ、室町時代に弓馬術界の規範的存在となった。また、足利将軍家から命を受けて諸礼の法式の整備確立にもかかわった。徳川時代には將軍家の弓馬礼法師範を勤めて、次第に武士階級に大きな影響を与え、弓馬礼法ならびに諸礼法の宗家として現在まで及んでいる（二木・入江・加藤, 1994, 33～34及び41～42頁）。

このように、武道の歴史と礼法は強い関わりを持っているのだが、空手道のみならず現在の武道全体に共通する「礼に始まり礼に終る」という「礼」に関する格言はいつたいいつ頃から言われているのだろうか。その出所に関して、中村民雄は次のように述べている。

¹ 慶應義塾空手研究會（1930）『こぶし』、1頁。この『空手二十箇條』はいつ著作されたのかは、明確ではないが、「慶應義塾空手研究會」1930年11月27日発行の『こぶし』という会誌の創刊号には掲載されている。また、今日に至るまで、『空手二十箇條』は全体あるいは格言別に、多くの文献に引用されてきた。空手道においては、教えに関するもっとも著明な書物であると考えられる。

「江戸時代から武術は礼儀を重んじるということが説かれてきたが、『礼に始まり礼に終わる』ということばはなかった。…このことばの初見は、内藤高治が『剣道初步』（『武徳誌』第二篇七号、明治40年7月）で、礼について解説した中に、『武術の講習は總て礼に始まり礼に終るを以て肝要とす』と述べられているのが最初のようである」（中村、1994、331頁）。

これによれば、武道と「礼」の長い歴史的なかかわりの中で、「礼に始まり礼に終る」ということば自体は比較的新しい格言のようであるが、現代の武道修行者にとってはもっとも基本的格言の一つとして、世界中に知られ、定着しているのが、この「礼に始まり礼に終る」である。

また、岸野雄三がいうように「日本の『礼』は『儒教の礼』として中国から摂取消化した用語であり、『礼』は儒教を無視しては考えられない」（岸野、1991、2頁）。つまり、「礼」は日常生活の中に倫理的・道徳的規範として長年にわたって用いられた儒教的基本道徳「五常（仁、義、礼、智、信）」の一つである。だから「礼」は単なる形式的な挨拶や上半身を曲げるお辞儀だけではなく、前に述べたように、内面的な心の表れでなければならない。武道に限らず、日本の礼法に大きな影響を与えてきた小笠原家の小笠原清信は『しつけの事典』の「指導の要点」として次のような心の持ち方を求めている。

「礼は、相手を尊敬する心の表現としておこなうものである」（小笠原、1985、59頁）。

おそらく、前に述べた富名腰も『空手二十箇條』を著作された時、自然に人間生活に影響を及ぼす「五常」を意識しながら、このように考えておられたのではないかと思われる。また、神道揚心流柔術四世であり、和道流空手道開祖である大塚博紀も次のように述べている。

「…武道は礼に始まって礼に終るといわれて礼儀を重んずる。武道の礼儀は相互に人格を尊敬する心が形となっての現れである。その尊敬心は愛の心から生ずる。その礼儀の作法は単なる形式ではなく愛より発した尊敬心の正しく表現されたものでなければならない。さらに武道の礼儀作法は品位と共にその一挙一動に寸分の隙がなくいつ如何なる場合にも直にその状勢に応じて如何様にでも体勢の変化が可能な作法であることが普通の礼儀作法と違うのである。常住坐臥この作法の鍛錬によって心に緩みのない精神が鍛えられるのである」（大塚、1970、8～9頁）。すなわち、武道の場合、「礼」とは、師を尊敬し、師は弟子を慈しみ、共に修行を積む者は相互に敬愛し、一緒に稽古や試合に励んで互いに「心技体」の向上を目指そうとする、ある意味での共同の「約束ごと」である。いうまでもないが、武道においては

その練習の場合であっても「相手」いわゆる「敵」を制することが大切な目標になっている。しかし、相手や仲間と一緒に練習に励むことや助け合いがなければ、あるいは相手と一緒に試合をすることがなければ、即ち単なる「殴り合い」の領域を超えないければ、武道修行を通じて「技」と「体」の向上も、「心」いわゆる「人間性」の向上も目指すことはできない。言い換えれば、「心技体」の統一した働きも発揮されない。だからこそ「礼」は武道の本質として欠かせない、一つの根本的道徳的本質要素なのである。

しかし、このような理想に対して、武道の試合にあっても、近年特に相手に対する「礼」が乱れているように見受けられるのである。例えば、試合の始めと終わりに、相手が目の前にいるのに、相手がいないかのような「礼」の姿がしばしば見られるのはその一つである。いわゆる単なる頭を下げ、「礼」を形式的に行っているに過ぎない。相手に対する尊敬の念を持つどころか、「礼」そのものの意味が理解されていないのではないか。これは勝敗だけにこだわる過ぎる傾向と無関係ではないだろう。試合に勝つために、精一杯の努力をすることは当然であるが、だからといってそれのみに気を取られ、相手に尊敬の念を持った礼をしない理由にはならない。もっとも、それは若い選手だけの問題ではなく、長い経験を持ち「礼」の意味を熟知しているはずの指導者の問題もある。山根一郎がいうように「…礼法の奥義は、それにふさわしい者が口伝として対面で継承されるものであり、また所作の仕方は正しい所作を実地で訓練することによってはじめてその意味が非言語的に体得される」(山根, 2004, 59頁) ものであるから、弟子にとってモデルとしての役割を果たさねばならない師は礼の作法においても大きな責任を持つ。

また、試合終了時の勝者によるガッツポーズも「礼」の精神に悖るように思われる。勝者がこれを行うことによって、相手は敗者の悲哀に加えて、勝者からのさらなる屈辱感を味わわせられていることになる。それでは「礼」あるいは「武道は礼に始まり礼に終る」という精神はどこに消えたかと言わざるを得ない。せっかくのすばらしい礼の「約束ごと」があるのに、これは無視される一方である。反則や罰則規定の有無にかかわらず、武道の場合は「礼」の精神を忘れないように心掛けなければ、歴史的な伝統文化とはいえないであろう。

まとめ

武道に限らず、勝利は誰にとってもうれしいことである。その率直な心情を身体で表現することは人間として自然であるかもしれない。だが、特に武道の場合、相手と

格闘で争うもので危険も伴い、自分のことだけを考えるのではなく、一緒に競つてくれた相手の存在に感謝し、勝者としての喜びを抑制しながら、相手の心情を思いやるところに「礼」の意味がある。多くの場合勝敗のみにこだわるスポーツ的な試合と違って、そこに「礼」が現代武道文化の不可欠な本質的要素として生きてくるように思う。武道修行の中で、このような「礼」の在り方を心がけると、相手に対する尊敬の念や礼儀作法が自然に身につく、あるいは人への思いやりが生まれてくる。競争社会といわれる現代社会に欠けているのはまさにそのことではないのだろうか。

「礼」を無視した指導方針や修行者自身の態度・努力からは、「武道憲章」²の第一条に書かれている「武道は、武技による心身の鍛錬を通じて人格を磨き、識見を高め、有為の人物を育成することを目的とする」(二木・入江・加藤, 1994, 222頁) という武道の目的は達成することはできない。「礼」は武道においては、相手を思いやる「礼」の重さを教えているのではないだろうか。だから「礼」という儒教的基本道徳は、武道修行にとって一つの重要な要素である。

【参考文献】

- 今村嘉雄 (1966) 『日本武道全集』, 人物往来社。
小笠原清信・白石暁 (1968) 『写真と図解による弓道』, 大修館。
小笠原清信 (1985) 『完全図解しつけの事典』, 東陽出版。
大塚博紀 (1970) 『空手道第一巻』, 大塚博紀最高師範後援会。
岸野雄三 (1991) 「儒教の古典と「礼」(その1)」, 『国際武道大学紀要第7号』, 国際武道大学, 1~13頁。
慶應義塾空手研究會 (1930) 『こぶし』創刊号, 慶應義塾空手研究會。
新村出編 (1998) 『広辞苑』第五版, 岩波書店。
藤堂明保 (2000) 『学研 漢和大字典』, 学習研究社。
中村民雄 (1994) 『剣道事典・技術と文化の歴史』, 島津書房。
ピットマン ハイコ (1997) 「空手道の歴史と『教え』について」, 『東北アジア体育・スポーツ史学会組織委員会, 東北アジア体育・スポーツ史学会第2回大会抄録集』, 東北アジア体育・スポーツ史学会組織委員会, 439~449頁。
Bittmann, Heiko. *Karatedō - Der Weg der Leeren Hand. Meister der vier grossen Schulrichtungen und ihre Lehre. Biographien - Lehrschriften - Rezeption.* Ludwigsburg und Kanazawa: Heiko Bittmann, 1999.
ピットマン ハイコ (2005) 「私が学んだ武道の名著から・第3回 空手は礼に始まり礼に終る事を忘るな」, 『月刊武道』6月号 (通巻463号), 日本武道館, 56~59頁。
Bittmann, Heiko. *The Teachings of Karatedō.* Ludwigsburg and Kanazawa: Heiko Bittmann, 2005.

2 1977年に設立された武道団体の統一組織としての「日本武道協議会」が、1987年にこの「武道憲章」を発表した。

- 二木謙一（1985）『中世武家儀礼の研究』、吉川弘文館。
- 二木謙一、入江康平、加藤寛（1994）『日本史小百科・武道』、東京堂出版。
- 富名腰義珍（1935）『空手道教範』、大倉廣文堂。
- 摩文仁賢和、仲宗根源和（1938）『空手道入門（別名空手術教範）』、京文社書店。
- 宮城長順（1934）『唐手道概説』、（手稿）。
- 山根一郎（2004）「中世武家礼法における中国古典礼書の影響」、『相山女学園大学文化情報学部紀要第4巻』、相山女学園大学文化情報学部、57~73頁。

The "Respectful Salutation" (*rei*) in the Japanese Ways of the Martial Arts

Heiko BITTMANN

It is often said that in the traditional Japanese Martial Arts respectful manners have been esteemed since ancient times. For example one of the important precepts for training in Karatedō is: "The Way of the Empty Hand begins with a respectful salutation and ends with a respectful salutation" (*karatedō wa rei ni hajimari, rei ni owaru*). However, this precept is not only limited to this martial art, it can also be found within other Japanese martial arts.

When analyzing this precept, we can find the influence of the Confucian Cardinal Virtue *rei* (Chin. *li*), usually translated as 'propriety'. However, when the same word is used to indicate the *rei* performed within the practice of Japanese martial arts, it can be translated as 'respectful salutation', a combination of two possible translations, 'respect' and 'salutation'.

The aim of this presentation is to shed light on the meaning of *rei* in the practice of the Japanese Ways of the Martial Arts (*budō*).

石川県における中国人留学生に関する調査 －私立大学文系学部生と国立大学理系院生の比較分析を通して－

宮崎 悅子

I. 問題と目的

近年、石川県内において中国人留学生が急増しており、その数は、2000年332人、2001年436人、2002年568人、2003年677人、2004年804人となっている¹。2004年度のデータでは、石川県の留学生全体に占める中国人留学生の割合は、全国平均である65%より高く²、73%である。2001年以降に中国人留学生が急増した背景として、次の2点があげられる。一つは、県内のいくつかの私立大学文系学部において、中国の大学と協定を締結し編入制度を設ける、あるいは現地入試を行う等、積極的な受け入れ活動を展開していることである。もう一つは、中国において経済成長や一人っ子政策によって進学競争が激化していることである。

このような状況を反映し、本学の大学院を志望する私立大学文系学部生（以下、私立文系学部生とする）の数が数年前から増えている。筆者の研究室にも電子メールを中心として大学院入試や研究生制度に関する問い合わせが数多く寄せられ、その数は例年と比べて数倍以上である。しかしながら、その学生たちはこれまで本学で受け入れてきた留学生と比べて留学目的や経緯が異なり（後述）、大学院が研究機関であるという認識が弱いため、スムーズに大学院に入学し、学位を取得することが難しいケースも生じている。

従来、金沢大学の中国人留学生は大学院生がほとんどであり、その中でも理系学生が多数派を占めていた。本学では留学生の生活実態調査を定期的に実施しており、理系大学院生（以下、国立理系院生とする）は何度も調査対象となっているためその実態が明らかになっている。本稿では、この国立理系院生と私立文系学部生を比較することで、留学経緯・生活状況・希望する進路などにおける私立文系学部生の実態を明らかにすることを目的とした。そして、それを元に受け入れ側における今後の教育指導と対応のために参考になる課題を明らかにする。なお、県内全体の中国人留学生のみを対象とした調査はこれが初めてである。

II. 手続き

【実施方法】

金沢大学で定期的に実施している調査の質問紙等³を参考に、私立文系学部生の実態を把握するのに適切と判断される数項目を入れ、独自に質問紙を作成した。質問は、調査対象者の基本プロフィール、留学先を選んだ理由、経済的側面、留学後に希望する進路など13項目である。質問紙は中国語で作成し、質問紙1部と提出方法について記した用紙を1セットとし、セットごとに封筒に入れたものを800部作成し配布した。留学生には、回答後返信用封筒に入れ返送するよう求めた。

【調査対象者】

中国人留学生が一定数以上在籍している県内7大学（石川県立看護大学、石川工業高等専門学校、金沢大学、金沢医科大学、金沢星稜大学、金城大学、北陸大学 50音順）の留学生800名を対象とし、配布は各大学の留学生関係部署を通して行った。

【調査時期】

調査時期は2005年7月11日～8月10日の約1ヶ月であり、回収数は178、回収率は22.3%であった。

III. 結果と考察

1. 回答者全体の結果

本調査の回答者178人のデータを所属先・専攻別に分類したのが表1である。最も多い回答数は私立文系学部生であり、国立理系院生がそれに続く。

表1 調査対象者の構成

被調査者の構成		文系			理系			不明	無回答
		私立	国立	公立	私立	国立	公立		
学部	計 118人	109	3	1	0	4	1	0	4
大学院	計 56人	4	4	0	2	43	2	1	
合計	174人	121人(68.0%)			52人(29.2%)			1人(0.6%)	4人(2.2%)

1-1 在学段階別

在学段階別留学生数は、学部118人（66.3%）、大学院56人（31.5%）である。学部生118人のうち109人（92.4%）は私立大学に属し、国立は7人（5.9%）と少ない。一方、大学院生56人のうち、国立大学生が47人（83.9%）を占め、私立大学生は6人（10.7%）と少ない（図1-1）。

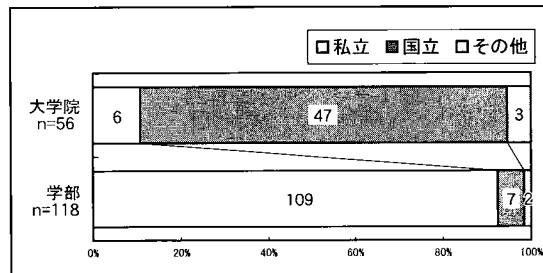


図1-1 在学段階内訳

1-2 専攻と国公私立別

専攻別では理系52人（29.2%）、文系121人（68.0%）である。学部・院の割合は、理系では学部5人（9.6%）、大学院47人（90.4%）と、圧倒的に大学院が多い。一方、文系は学部113人（93.4%）、大学院8人（6.6%）で、学部生がほとんどである（図1-2）。また国公私立別では、私立115人（64.6%）、国立54人（30.3%）、公立4人（2.3%）となっている。

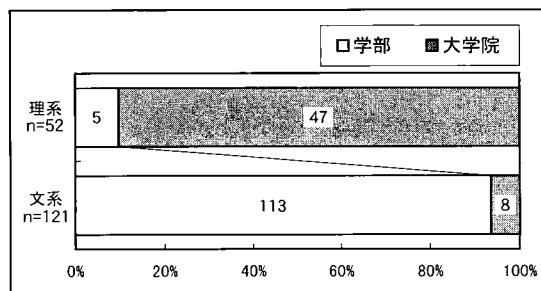


図1-2 専攻内訳

1-3 奨学金

奨学生ありと回答した者は93人（52.2%）で、奨学生無の者は70人（39.3%）、無回答は15人（8.4%）であった（図1-3）。奨学生受給者93人のうち、最も多いのは民間奨学生33人（35.5%）であり、次いでJASSO（日本学生支援機構）奨学生17人（18.3%）、県・市奨学生14人（15.1%）、日本政府奨学生10人（10.8%）、大学独自奨学生7人（7.5%）

となっている。なお、その他は12人（12.9%）と多いが、これは回答した奨学金の種類とその奨学金の通常の金額が明らかに異なっていたものをここに含めたためである（図1-4）。

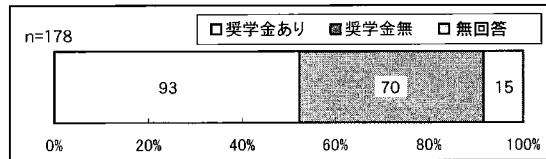


図1-3 奨学金有無

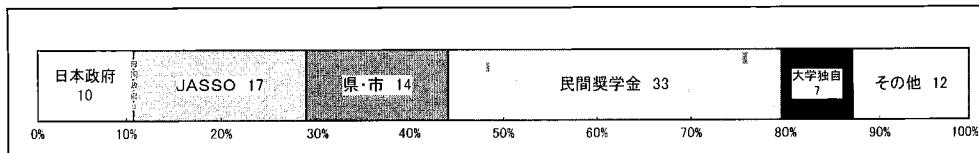


図1-4 奨学金種別（奨学金あり93人の内訳）

2. 私立文系学部生と国立理系院生の比較と検討

研究目的に従い、私立文系学部生と国立理系院生の2グループを取りあげ比較検討する。

2-1 性別と年齢

私立文系学部生（109人）のうち、女性が4分の3を占めている。それに対して国立理系院生（43人）は、女性より男性がやや多い（表2）。私立文系学部生の場合、24歳以下が4分の3を占めており、次いで25～29歳が多い。国立理系院生では逆に、25～29歳が24歳以下と比べてやや多い。

表2 性別と年齢

性別と年齢	性別		年齢			
	男性	女性	24歳以下	25～29歳	30歳以上	不明
私立文系学部生	30	79	83	20	5	1
国立理系院生	25	18	18	25	0	0
合計	55	97	101	45	5	1

2-2 留学の目的

日本留学の目的について、3つ以内の回答を求めた（図2-2）。私立文系学部生は「日本語や日本文化を学ぶため」や「日本の経済・社会システムの勉強」を選んだ割合が高かった。金沢大学における先行調査⁴（留学生センター、2004）によると、学部生

(ここでは文系・理系の区別はされていない)の留学目的は「専門知識を学ぶ」が最も多く、「日本語や日本文化を学ぶため」を目的としてあげたのは、短期留学生となっている。私立文系学部生の留学目的が、金沢大学における学部生よりも短期留学生と似ている点は注目すべきである。また、「将来、日本関連の仕事につくため」が51.4%と半数を占めていること、「日本の経済・社会システム」を学ぶことが強く関連していると考えられる。言い換えれば、「日本想定型」キャリアプランを指向していることも特徴として指摘できる。一方、国立理系院生の場合は、高い科学技術の習得や学位を目的としている者が多い。

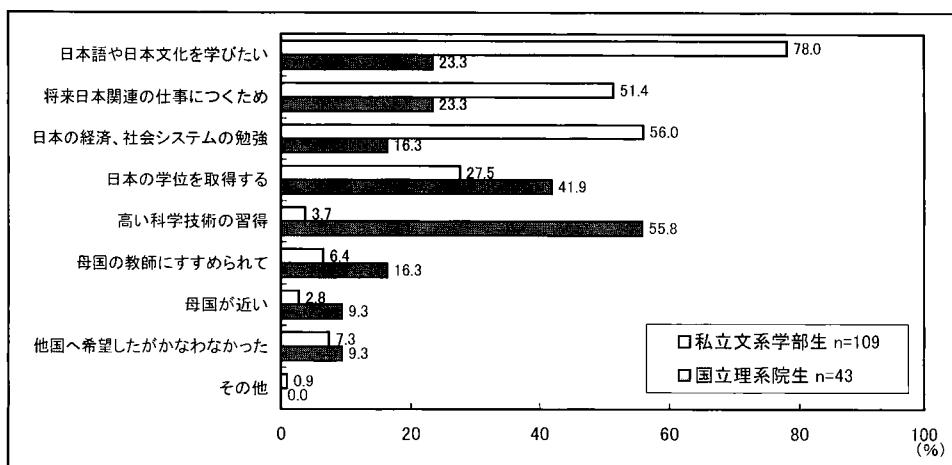


図2-2 留学の目的

2-3 石川県の大学を選んだ理由

石川県の大学を選んだ理由について、2つ以内の回答を求めた(図2-3)。私立文系学部生の場合は「大学間交流で推薦されたから」が最も多く、半数以上が選択した。次いで「母国の教師のすすめ」が3割弱であった。この回答からは、自分の意志より「協定があるから」、「他者からの働きかけがあった」という要因が強いことがうかがえる。留学生センター(2004)の先行調査との比較によると、「協定校・割り振り」と回答しているのは協定校の留学生を受け入れる短期留学生が最も多く、質問2の留学目的に統いて、ここでも私立文系学部生と短期留学生に類似性が見られる。それに対して、国立大学学部生の大学選択理由で最も多かったのは「家族・周囲の勧め」であり、次いで「希望する専門分野がある」であった。私立文系学部生が、国立大学学部生や理系院生と比べて、主体的に大学を選択する傾向が弱く、専門分野や教員の魅力を重視しない傾向にある。

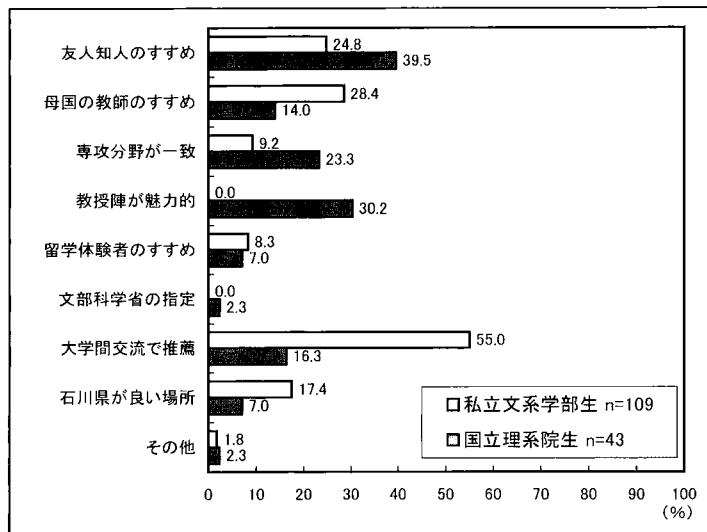


図2-3 石川県の大学を選んだ理由

2-4 大学情報を知った方法

出身国で日本及び石川県の大学情報をどのように知ったかという質問的回答を求めた(図2-4)。私立文系学部生で最も多かったのは、「友人知人から」であり、次いで「留学経験者から」であり、口コミを重視していることがわかる。国立理系院生の場合は、「インターネット」が最も多かった。この質問は、該当するものをすべて選択してもらったが、私立文系学部生は1つしか選択していない者が多かった。これは、協定校制度による入試負担及び授業料負担の軽減が魅力となっていることが要因と考えられる。一方、大学選択の自由度が高い国立理系院生は、複数から情報を得る傾向にあり、最も多く選択した回答者は4つ選んでいた。この結果から、国立理系院生は多角的かつ慎重に大学院の情報を収集していることがわかる。

2-5 主な収入源とその金額

2-5-1 主な収入源について10項目の選択肢を設け、それに該当する金額を千円単位で記入してもらった。ただし、項目を選択しても金額を記入しなかったデータもあり、有効回答数は、前述の図1-4の数字と異なる。

主な収入源については、私立文系学部生と国立理系院生で選択した人数がそれぞれ多いものの5項目を選んで示した(表2-5-1A)。私立文系学部生は、親兄弟からの仕送りを受けている割合が国立理系院生と比べて有意に高い($P < .01$)。また、仕送りの金額も、前者の平均金額は50,603円で、後者(25,000円)の約2倍が多い。

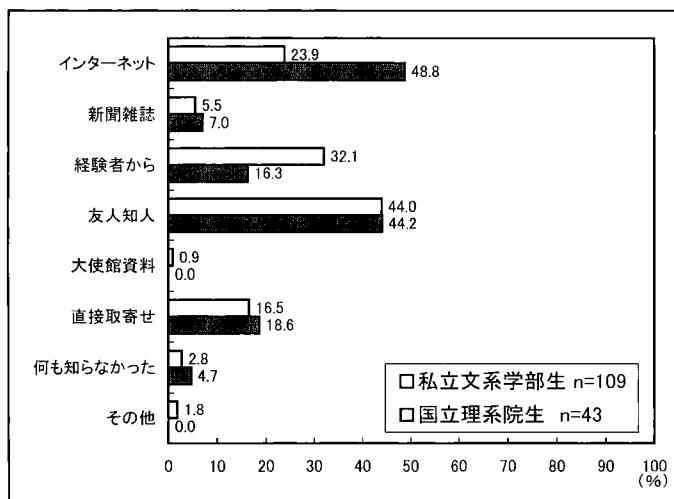


図 2-4 大学情報を知った方法

表 2-5-1 A 主な収入源（上位 5 項目）

グループ	順位	1位	2位	3位	4位	5位
私立文系 学部生	項目	アルバイト	親兄弟仕送	民間奨学金	JASSO	県・市
	人数(109人)	93(85%)	58(53%)	16(15%)	12(11%)	10(9%)
	平均金額(円)	60,613	50,603	31,250	46,667	29,000
	レンジ(万円)	1~15	1~15	2~15	2~5	2~5
国立理系 院生	項目	アルバイト	民間奨学金	日本政府	親兄弟仕送	配偶者
	人数(43人)	22(51%)	11(26%)	8(19%)	5(12%)	4(9%)
	平均金額(円)	55,000	126,364	175,000	25,000	67,500
	レンジ(万円)	1~15	3~20	17.5	1~5	2~10

アルバイトをしている割合は表 2-5-1 B で示した。私立文系学部生はほとんどがアルバイトをしており、その割合は国立理系院生より有意に高い ($P < .01$)。

一方、奨学金の受給状況については、私立文系学部生は民間奨学金・JASSO・県市奨学金が中心となっているが、国立理系院生は民間奨学金・日本政府奨学金が多い。奨学金を受給していると回答した93人(図 1-4 参照)のうち、私立文系学部生は47人(43.1%)、国立理系院生は20人(46.5%)であり、割合は後者がやや高いものの、有意差はない。その理由の一つとして、JASSO や石川県の奨学金が各大学に在籍する留学生数に比例して奨学金の枠を決める方式をとっていることが考えられる。また、収入源について「その他」として、「大学独自の奨学金20,000円を受給している」と記入した者が7人いた。私立大学には独自の奨学金制度を設け、成績優秀者にとって比

較的高い率で奨学金を受給できる機会がある場合もあり、このことも奨学金受給率に目立った差がないことにつながっていると考えられる。しかしながら、平均受給金額は、私立文系学部生32,383円（JASSO・県・民間・日本政府の4つの奨学金がある）、国立理系院生123,788円（日本政府・JASSO・民間の3つの奨学金がある）と大きな差があり、後者がはるかに恵まれた状況にあるといえる。私立文系学部生の仕送り・アルバイト率の高さの背景には、私立大学における学費の高さに加えて、受給できる奨学金の低さも関係している。

表2-5-1B アルバイトの有無

アルバイト		している	していない
私立文系学部生	人数	93	16
	%	85.3	14.7
国立理系院生	人数	22	21
	%	51.2	48.8

2-5-2 アルバイトの種類

アルバイトをしていると回答した学生は私立文系学部生と国立理系院生合わせて115人であった（表2-5-2）。なお、回答者のうち10人が2つ以上のアルバイトを掛け持ちしているため、アルバイトの数はアルバイトをしている人数より多くなっている。アルバイトの種類で最も多かったのは「飲食店関係」、次いで「販売員」であり、この2つで7割強を占める。私立文系学部生に限った場合、飲食店関係で働いているのは、アルバイトをしている93人のうち71人（76.3%）であり、国立理系院生より有意に高い（ $P < .01$ ）。

国立理系院生のアルバイトについては、飲食店関係以外は「一般事務」と「配達業務」がそれぞれ4人（18.2%）、また「その他」3人（すべてリサーチアシスタント）であり、私立文系学部生より多種類のアルバイトをしている。

2-6 卒業後の進路

2-6-1 卒業後の希望進路について示した（図2-6-1）。私立文系学部生の場合、最も多かったのは、「日本で進学」が52人（47.7%）であり、次いで「帰国して就職」が30人（27.5%）である。その次に多いのは「日本で就職」の15人（13.8%）であるが、先の「日本で進学」とあわせると、近い将来も日本にいる予定である者の割合は61.5%と高く、半数を超えている。一方、国立理系院生の場合、最も多かったのは「帰国して就職」の15人（34.9%）であり、私立文系学部生の希望と異なる。これは、

表2-5-2 アルバイトの種類

アルバイト職種	人数	一般事務	家庭教師	塾講師	通訳業務	作業員	配達業務	技術関連事務	飲食店関係	販売員	その他	合計
私立文系学部生	93	1	1	0	1	8	4	0	71	15	4	105
	%	1.1	1.1	0.0	1.1	8.6	4.3	0.0	76.3	16.1	4.3	100
国立理系院生	22	4	1	0	0	1	4	2	7	3	3	25
	%	18.2	4.5	0.0	0.0	4.5	18.2	9.1	31.8	13.6	13.6	100

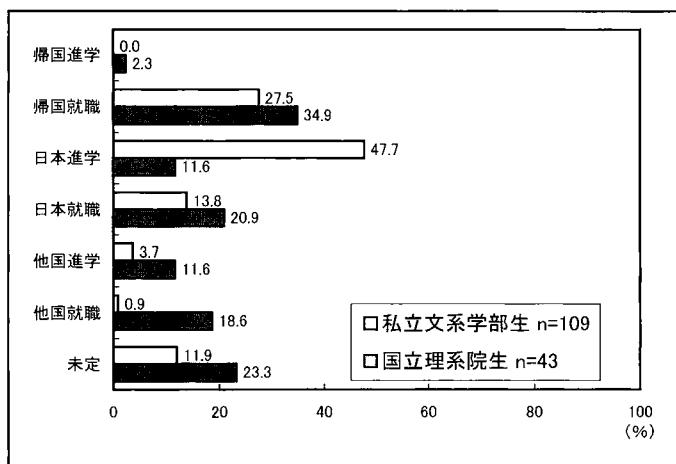


図2-6-1 卒業後の希望進路

先行調査（留学生センター、2004）と同様である。また、国立理系院生は私立文系学部生より出身国以外での就職の割合が有意に高い（ $P < .01$ ）。しかしながら、「未定」が10人（23.3%）、「日本で就職」が9人（20.9%）となっており、国立理系院生においても、従来主流であった「帰国して就職」希望者が減る傾向が見られる。従って、中国人留学生のキャリアプランの変化に伴い、受け入れ側である大学や地域において、新たな対応が求められている。特に、私立文系学部生の日本での進学希望者の多さについて、大学のみならず、行政・地域社会も注目すべきであろう。

2-6-2 将来希望する職業については、私立文系学部生で多かったのは、「商社」49人（45.0%）、「通訳翻訳」34人（31.2%）、「大学・教育機関」22人（20.2%）である（図2-6-2）。先の質問で「日本で進学」を希望した52人に限って希望する職業を調べたが、多い順番より「商社」の29人（55.8%）、「通訳翻訳」の15人（28.9%）、「大

学・教育機関」は13人（25.0%）であった。一方、先行調査（留学生センター、2004）では、本学の文系大学院生が希望する職業で最も多かったのは「大学などの教育・研究職」で、その割合は5割弱であった。つまり、私立文系学部生の場合、大学院に進学しても「大学・教育機関」で働く希望はそれほど高くない。

国立理系院生の場合は、「大学・教育機関」の割合が他の項目と比べて有意に高い（ $P < .01$ ）。数値には多少の違いは見られるものの、これは先行調査の結果と同様の傾向が認められる。

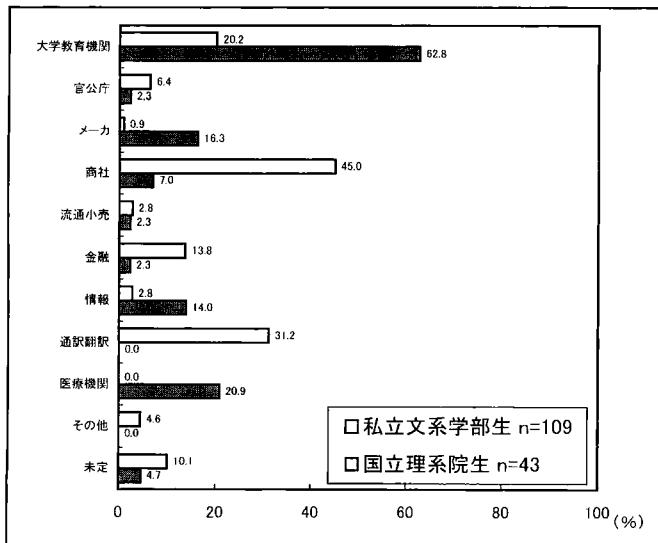


図2-6-2 将来希望する職業

IV. まとめと今後の課題

以上のように、私立文系学部生と国立理系院生を比較してきたが、ここでは私立文系学部生の実態を明らかにするために特徴的な点及び今後の留学生受け入れ・教育体制を拡充させていく上で特に重要と考えられる点について以下に記す。

- ①私立文系学部生は国立理系院生と比べて、親兄弟からの仕送りを受けている者及び、アルバイトをしている者の割合が2倍と高く、仕送りやアルバイトは留学の前提となっている。仕送りや、アルバイトに時間を多く割かれることなく学べるよう、奨学金の拡充が望まれる。
- ②私立文系学部生は、主な留学目的として「日本語や日本文化を学ぶため」をあげ

た者が多かつたが、これは、本学の協定校から来る短期留学生と同じである。短期留学生を対象とした「日本文化体験型留学」は、「学位取得型」の教育を前提とする学部教育と根本的に異なる。従って、私立文系学部生の留学目的は、専門教育を重視する大学教員側と認識に隔たりがある。今後、私立文系学部で留学生を指導する教員及び大学院修士課程に進学した私立文系学部出身の留学生に面接調査を行うことで、両者の相違を明らかにしていくことが課題である。

③私立文系学部生の希望進路は、「日本で進学」が最も多かつたが、これは当然大学院修士課程への進学希望を意味する。今回の調査では進学希望の理由を明らかにできなかつたが、今後急増が予想される私立文系学部出身の大学院進学希望者の様々な要望や状況、「大学院に何を期待しているか」、「実際に進学先を探せるか」、「進路選択に関わる情報をどのように入手しているか」、また「大学院に入学後困ったことはあったか」、「院修了後の希望進路は何か」といった点を明らかにすることは、本学をはじめ、同じ状況にある他大学において受け入れ体制を整備する上で非常に重要である。例えば、大学院で学ぶために必要な日本語能力や研究能力を育成するための橋渡し的教育や、キャリアプランを考慮した進路・進学指導が、より一層必要とされるだろう。

【付記】本研究は、アイ財團から助成をいただきて行った「石川県における中国人・ベトナム人留学生の基礎調査」（財團法人アイ・社会文化推進事業団発行、2005年）から、中国人留学生に関するデータを一部使用した。調査票の作成及び各大学への協力依頼にあたっては、アイ財團の吉田誠栄智氏にご協力をいただいた。また、質問紙・調査票の中国語翻訳にあたっては、李培氏（金沢大学大学院経済学研究科留学生）に作成いただいた。本論の執筆の際、苗田敏美氏（金沢大学非常勤講師）に分析をはじめいろいろなご助言をいただいた。ここに記して感謝申し上げたい。

【参考文献】

- 1 石川地域留学生交流推進会議 2005 2004 2003 2002『留学生交流いしかわ』vol.13～vol.16
- 2 文部科学省高等教育局学生支援課 2005『2004年度 我が国留学生制度の概要』
- 3 金沢大学留学生相談・指導専門委員会（岸田・中崎・宮崎・八重澤）編 2003『金沢大学2002年留学生生活実態調査報告書』金沢大学留学生センター
- 4 金沢大学留学生相談・指導専門委員会編 2004『留学生を知るためのガイドブック－2002年留学生生活実態調査の分析と考察－』金沢大学留学生センター

A Survey of Chinese Students in Ishikawa Prefecture

— A Comparative Analysis of Liberal Arts Undergraduates and Graduate Students in the Sciences —

Etsuko Miyazaki

In recent years, the number of Chinese students has been increasing rapidly in Ishikawa Prefecture. Almost all of these students are undergraduates majoring in liberal arts at private universities. They differ from graduate students studying natural sciences at the national university in the following ways. 1) Their main purpose of studying in Japan is to learn Japanese and learn about Japanese culture, not to obtain specialized knowledge. In this, their motives are the same as the short-term exchange students at Kanazawa University. 2) They have chosen which university to attend based on recommendations from their professors in China, or because there are existing student exchange programs in which their universities participate, rather than on their own initiative. Compared to undergraduates at the national university surveyed in a previous study, these undergraduate exchange students at private universities do not focus on the attractions of a specialized department or a particular professor when selecting a university. 3) More than 60% of these undergraduates hope to remain in Japan after graduation, either to attend graduate school or to find employment, rather than returning to China immediately. 4) The proportion of these undergraduate students receiving scholarships is roughly the same as among graduate students in the sciences at the national university, but the amount of each scholarship is quite low. Therefore, for these undergraduates it is necessary to receive monthly allowances from their parents and to have part-time jobs.

金沢大学における日韓共同理工系学部 留学生事業に対する中間評価報告

太田 亨

I. はじめに

日韓共同理工系学部留学生事業（以下、「日韓プログラム」と略す）は平成12（2000）年度から10年をめどに開始された日韓両国政府による共同プログラムである（太田 2001：53）。金沢大学では第1期（平成12年度）から、本稿執筆中の第6期（平成17年度）まで連続して、日韓プログラムによる学生を計14名受け入れてきた¹（表1参照）。

表1 金沢大学における日韓プログラム学生受け入れ状況

学 部	学 科	第1期 2000-05	第2期 2001-06	第3期 2002-07	第4期 2003-08	第5期 2004-09	第6期 2005-10
工学部	土木建設工学科	1				1	
	物質化学工学科	1					
	電気電子システム工学科		1	1	1		
	人間・機械工学科				1		1
	情報システム工学科	1	1	1			
理学部	数学科				1		
	物理学科			1		1	

第3期からは理学部が日韓プログラムに参加し始め、すでに3名の学生を受け入れている。また、2005年3月には第1期生がプログラムを修了し、第1期生3名のうち1名が金沢大学大学院自然科学研究科に入学した。

このように、金沢大学における日韓プログラムは、受け入れ人数こそ多くないものの、毎年着実に学生を受け入れており、留学生センターにおける半年間の予備教育とそれに続く4年間の学部教育が連携し、さほど大きな問題もなく現在に至っていると一応総括できる。

しかしながら、細部を見てみると、この6年の間に日韓プログラムと金沢大学を取り巻く状況は大きく変化しており²、10年をめどに開始されたプログラムの中間地点を

過ぎた2005年12月現在において、金沢大学として日韓プログラムに参加してその結果がどうであったのかを、プログラムに参加する学生の立場から、プログラム生を受け入れた学部教員の立場から、そして予備教育を担当するコーディネーター（筆者）の立場から、という形でまとめておく必要があると考える。その結果は、プログラムの後半5年間を運営するために留意・改善しなければならないさまざまな点を浮き彫りにしてくれるものと思われる。さらに、金沢大学から発信されるこのような形の中間報告は、日本全国で日韓プログラム学生を受け入れている延べ39大学³の関係者にとっても参考資料となるだろう。

そこで、筆者は留学生センターにおける日韓プログラム予備教育の責任者という立場から、第1期から第4期までのプログラム学生、および学生の学部での指導教員にアンケート調査（以下、「調査」と略す）を行った。本稿では、調査の概要と結果を報告し、さらに調査結果を受けて予備教育側の立場からのコメントを述べる。

II. 調査概要

本調査は、齋藤他（2004）で行った「日韓プログラム志望から学部進学まで」の調査を補完し、「学部進学後の日韓プログラム生の学業及び生活面における意識を調べるとともに、学部進学後の受け入れ教員からの反応や意見を知る」目的で行った⁴。日韓プログラムでは、予備教育を担当する（本学の場合は）留学生センター、学部進学後の受け入れ先である学部・学科との連携が何よりもまず必要であり、またその2つの組織で教育を受ける日韓プログラム生の意識を追跡調査することが欠かせないからである。

調査に当たっては、日韓プログラム学生用と受け入れ教員用の2種類を作成した（本稿末の付録参照）。調査事項は以下で述べるように上記の齋藤他（2004）での質問事項との連続性を重視し、かつ2000年から年1回の割合で継続的に行われてきた「日韓プログラム協議会」⁵で扱われてきて課題テーマを参考に選んだ。なお、学生向けは面接による口頭調査にし、受け入れ教員に対しては記述による回答型式にした。また学生向け調査においては、学生本人の同意を得て内容をすべて録音し、後日文字化した。

学生向けの調査内容は、①学部学生としての学業面・生活面に関するもの（付録の調査項目1番目から6番目まで）、②卒業後の進路に関するもの（同7番目）、③学部入学後から見た予備教育に対するコメント（同8番目）、④プログラム全体に対するコメント（同9番目）、となっている。

一方、受け入れ教員向けの調査内容は、①受け入れたプログラム学生に対する様々な角

度からの所見（付録の調査項目1番目から6番目まで）、②卒業後の進路に対するアドバイス（同7番目）、③プログラム学生を受け入れて負担に感じる事柄（同8番目）、④予備教育に対する要望（同9番目）、⑤プログラム全体に対するコメント（同10番目）、となっている。

調査時期は、学生に対する面接調査が2004年6月から2005年1月にかけて、受入れ教員に対する調査が2005年2月の1ヶ月間である。

III. 調査結果

学生の回答者は計9名であった。1期生は卒業を控えて卒業研究に従事していたことなどもあり3名中1名の回答であった⁶。他方、2期生から4期生は全員が回答した。5期生は調査期間中まだ予備教育を受けている最中であったため対象から外した。一方、受入れ教員分については8名中⁷4名から回答があった。

本調査では、1) 本学配置の日韓プログラム生の絶対数が少ないと、2) 被験対象者の生の声を内外のプログラム関係者に幅広く知らしめることの2つの理由から、統計的分析をほぼ行わないままの形で結果を提示する⁸。まず、日韓プログラム生に対するアンケート結果からである。（表2参照）

表2 日韓プログラム生対象アンケート調査結果

期	健 康	コメ ント	単 位	コメ ント	教 養	専 門	卒業研究	課 外	進 路	予備教育	事業全体
1	5		1	卒業できる。あと専門4単位（現在受講中）と卒業研究を残すのみ。	レポートを書きながら日本語の勉強もできた。	自分の専門に対する勉強もできた。	高分子を作って、溶媒との反応を調べて、いろいろところに使えるかを研究している。	1年半アカペラサークル活動をしていた。アルバイトで韓国語を教え、県や市の要請があつたとき通訳の仕事をして、石川県全体を知ることができて良い経験になつた。	はじめは就職を考えたが、今はもっと研究を続けたほうがよいと思うようになった。金沢大学、東京と大阪の大学の大学院入試を受けるつもり。	日本に関する勉強になった部分があった。その当時は重要ではないと思ったことでも後から役に立つた点もあった。きちんとした日本語の勉強は学部に入つてからできるようになつた。	奨学金の額は金沢での生活には十分だった。

2	3	勉強が忙しく就寝時間が遅くなっている。	1	予定よりは少ないが、進学には問題ない。取得数は普通と思う。	特にやさしかったのは日本語や一般的な教養科目(キャラアブラン、ペインチャービジネス)。医学部向きの「薬とライフサイエンス」や教育学部向けの「21世紀の教師像」は工学部の自分が聞いていて難易度が高くつらかった。	1年生のときはやさしいとか難しいといふことはなかつた。2年生になつて全部専門科目になつて難しくなつた。(特に私は数学的なアルゴリズムなどは自分でとつて難しかつた。専門の学生でも全部理解するのはむずかしいといわれていた。	情報システムで一番人気がある「集積回路」をやりたいが、研究室は社会から要求されるテーマを扱つて未だある。)	1年生のときクラブ活動をしようとしたが、今は特にしていない。	去年日の手術を受けたので兵役は免除されている。だから今は就職よりも進学したいと考えるようになつた。それに大学院を出ると年俸も違うと聞いた。進学先は金沢大学大学院を考えている。	数学のカリキュラムが線型代数や微積分で、学科の1年生のと同じで役に立つた。少なくとも自分の学科は予備教育のときの内容で十分だった。日本語は2年のときうまくなつたと感じたが、3年になつて先生とのコミュニケーションが増え専門的内容になつて、日本人学生の発表を見るとな々話にくくなつた。
2	3	3食きちんと食べている。起きるのがつらい。	0	あまり興味がない。取得状況もよく把握していない。	自然系の科目が難しかつた。パズルのような科目が特に難しかつた。大講義は出席すればよかつたのでやさしかつた。	電気系が難しかつた。通信や情報系の科目はやさしかつた。	今はしたいことはない。4年前は1年前になって研究室のリストを見て決める。	今はやっていません。前は1年前期6ヶ月間馬術部に入つていた。	卒業したらたぶん韓国で就職したい。仕事をすれば兵役免除になるものがある。4年の終わりごろに調べるつもり。	もっと自由時間がほしかった。テレビを見る時間がほしい。それが兵役と日本語の勉強に役に立つ。
3	5	予備教育のときの悪習慣を取り除くのが大変だった。韓国は大学に入つたらおしまいといふ風潮があるが、日本は違うので大変だった。	1	計画より6つほど足りないが、大体大丈夫。	線型代数などは予備教育でうけたので困らなかつたが、社会科学の科目は歴史などに関係していて、特に漢字がわからず(中国の王朝名)難しく感じた。自然系はわかっている部分があつたので何とかなつた。	プログラミングはすぐにできるが、電気回路がだめだった。難しい。	適応システムなど、普遍のコンピュータで環境にどのように順応するかに興味がある。	今はやっていない。	4年までにお金を貯めていいって、お金がたまつたら進学を考えた。進学して博士課程まですすめば兵役はしなくてもよい。だめだったら兵役をすませたい。	日本語は勉強には困らないが、小説を読むには足りないと感じる。日本語の勉強は十分だった。少人数だったので、専門教科では問題をもつと解いて個人的にみてくればと良かった。

3	5	生活のリズムは大丈夫。料理は1年もすれば上手になつた。	1	取得する単位は全部とつている。何も落としていない。	出席だけすればよい科目はやさしかつた。物理の最前線というものは毎回レポートを書かなければならず難しかつた。	数学科から来た先生の教え方には難しく感じた。でも、わからない点は質問した。	GPUと量子力学とあわせて何かできなかいかと考えている。	何もしていません。趣味があるから大丈夫。	兵役よりもまずアメリカの大学院を希望している。	予備教育のとき日本語力が足りなかつたが、1年になつて日本語がわかるようになり自分で動けるようになつた。	12月末に新潟の韓国教育院から突然電話がきて成績が出ていたが、それほどよくないと思う。
3	4	今は睡眠も食事も問題ない。	0	1年のときの計画が粗すぎて今大変。3年前期で教養は全部取れると思う。専門は大丈夫。	日本語はあまり難しくない。化学はもともと苦手なので難しく感じる。社会科目も難しい。日本事情以外取れる科目が少ないから。	やさしいものもないが、難しいものもない。	量子力学や一般相対性理論は自分で勉強している。	していません。教養の単位をとるため今は大変。今は充実しているかどうか感じない。	兵役に行かないで大学院へいけたらよい。アメリカの大学院に入りたいので、英語も勉強している。	日本語は役に立っている。数学の線型代数は大事なので、勉強のテンポを遅く丁寧に基本をすればよい。	理学部に入る人は横み重ねが大事だということを聞いた。
4	4	時々リズムは狂うが、本当にやろうと思えばやれるので、すぐにリズムは戻る。教養の授業はときどき遅刻してしまう。料理もきちんとできている。	1	前期で24単位取れていて、後期も22単位取れる予定で、これで教養の科目は終わる。	数学分野と英語はやさしい。文学に関連することは内容が難しい。宿題やレポートを書くのが特に難しい。前期の「マネージメントと意思決定」というのは難しかつた。	専門は全部難しい。高校と違つて、全部証明問題ばかりでまだ慣れていない。	専門的な興味はまだ今は分からなない。	何もしていない。	最初は大学院を考えるが、入れなかつたら軍隊に入る。軍隊が終わったらもう一度大学院を目指す。	予備教育で勉強した数学は基礎科目には役に立つ。日本語の授業を受けているなかつたらもっと難しく感じただろう。また、予備教育のとき学部の授業を取ってみるとよかつたのではないか。自分の専門についてどのように進めばよいのか分かる。	お金が足りない。奨学生のサインが厳しい。2月に帰国するとその月の奨学生が出ていなかった。

4	4	特に問題はない。健康状態は良い。料理は問題があるといえれば問題があるが何とかやつていい。	1	今は良い。前期は何も単位を落とさなかつた。	プリントなどがきちんとある科目はやさしい。先生が黒板にばらばらと書くだけの授業は難しい。留学生にとって授業中にすべての内容を理解できるようにするのは難しく、家に帰ってから復習できないと難しい。理系の科目のほうが聞きやすい。	うちの学科は文系的な科目が多く、前期は序論でした。が、環境学と人体科学は内容がけっこうあって難しい。	まだ1年生なので学科で何ができるかわからぬが、興味は予備教育の時から変わっていない。	何もしていない。	大学院に入ろうと思っている。韓国人男子の場合、大学院が軍隊しかないから。外国の大学院がよい。	予備教育は日本語のほうが役に立つている。授業が聞きやすくなつた。数学や物理よりも日本語のほうが役に立つた。でも、理系のための漢字を独立した授業で教えてくれると良かった。化学や人体工学や環境学、生物いろいろな漢字語がでてくる。予備教育全体は良かった。	軍隊の問題だが、大学の途中で軍隊に入るようにしてほしい。4期生から入学や物理が変わつて予備教育で学生が勉強しなかつた。でも、理系のための漢字を独立した授業で教えてくれると良かった。緊張が保てるから。
4	5		1	前期はSが7つ、Aが6つ、Bが1つだった。後期もだいたい単位はもらえると思う。	高校時代に地球科学に転学したから、それに専門はそれなりに難しくなりけどそれほど問題ない。	化学のほうはやさしかつた。レポートをたくさん書く科目は難しかった。自分の場合はまず韓国語で書くので日本人よりも何倍も時間がかかる。	専門はそれなりに難しくなりけどそれほど問題ない。	化学のほうは何もしていない。	大学院に入って勉強し、その後軍隊に行つて、士官学校の教官試験を受けて兵役をしたいと思っている。	別にありません。	選抜方法が変わったが、勉強するかどうかや、留学の準備をするかなどは自分の心の問題だと思う。先に配置試験があつたほうがよい。自分の場合は日本語の勉強に必死で、留学の準備をする余裕がなかった。

全般的に見ると、さほど経済的な心配をすることなく勉学に打ち込んでおり、難いと感じる科目に個人差はあっても卒業に必要な単位取得に向けて努力している、と総括できる。男子学生の場合、兵役よりもまず大学院進学を目指しており、中にはアメリカの大学院を目指して英語の勉強もしているという者もいる。予備教育についてはほとんどが非常によかつたという積極的な評価をしており、さらに専門教科の漢字等の教育を望む者も見られた。事業全体に対するコメントでは、いろいろと有益な意

見が出ている点も見逃せない。兵役問題、いわゆる飛び級による早期卒業→大学院進学制度について、また卒業後の就職に関する情報を望む声や、学部に入学してからわかつた所属学部の特徴を後輩に伝えるメッセージ等、さまざまな意見が寄せられた。

次にプログラム学生を受け入れた教員に対する調査結果である。(表3参照)

表3 日韓プログラム受け入れ教員対象アンケート調査結果

所 属	全 体	学 業	単 位	生 活	相 談	頻 度	感 想	兵 役	負 担	要 望	事 業 全 体
工学部物質化学工学科	4	4	3	3	1	5	4	具体的な指導はできない。本人の判断に任せる。受入れの時期と勉強状況とはあまり関係がないので、いずれでもよい。	3, 4, 5	指導教員は生活指導ができない。プライバシー等のこともあり、全く関与していません。	
工学部情報システム工学科	4	3	4	3	1	3	3	現在担当している学生は大学院志望しているが、とくに兵役の相談は受けていません。奖学金や大学院入試について質問を受けました。もし、兵役の相談を受けた場合は、進学を先にすることを勧めると思います。	5	現在担当している学生については、特に問題ないが、日本語の理解が不十分な学生については講義聴講に支障ないような日本語教育を期待したい。	特にござません。
理学部数学科	3	3	3	3	0		3	私の知人(韓国在住の数学教授、およびポスドクの研究者達)の例では、全員兵役を終わってから大学院で勉強したようです。これらの例からも、もし本人が本当に勉強したいのであれば、大学院進学までの空白期間はあまり問題にならないのではないかと助言する。	5		

工学部人間・機械工学科	4	3	3	3	1	3	4	本人の優先順序のとおりでよい。学部と異なり、考え方と実行力がより重要である大学院では、2~3年の空白は問題でなく、要はやる気の問題である。	3, 11	角間にほとんどいるため接触が少ないためか、特に言うことはない。ただし、過去のマレーシア政府留学生のほとんどは基礎学力が不足しており、単位修得に非常に困っている。普通なら留年。日韓留学生は同費留学生であり、また、支援組織もしっかりしているのでそのようなことはないと思われる。担当の学生は性格的に明るく、また、ゼミナールや発表会での内容から判断して非常に好ましいと感じる。但し、日韓留学生の一般論かどうかは判断できない。	
-------------	---	---	---	---	---	---	---	---	-------	--	--

全体的には、日韓プログラム生の受入れを肯定的に評価しているということがわかる。男子の兵役とそれに絡む大学院進学に対するアドバイスでは「本人の意志次第」という意見が大勢を占め、兵役によりブランクが生じたとしても問題なしとしている。この点は今後プログラム生に対して情報としてきちんと伝える必要があるだろう。また、プログラム生を受け入れての負担は「学業・進路指導」が2例、「住宅保証」が3例見られたが、後者の問題に関しては、注2で述べたとおり、第5期から大学による機関保証制度が創設されたことにより解消している。

IV. 予備教育コーディネーターの立場から～調査結果に対するまとめ～

前述のとおり、日韓プログラム開始からの6年間にプログラムをめぐる状況がさまざまな形で変化した。本稿ではそれら一つひとつに対して言及することはできないが、金沢大学における日韓プログラム予備教育を統括する立場から、アンケート結果をまとめさらに現状を踏まえた上での簡単な提言を行いたい。

1. 日韓プログラム生対象の調査を受けて

1) 予備教育の質を調査時点まで程度の水準に保ち続けること

4期生までを対象にした本調査で、予備教育の評価は上述のように比較的高かったと言える。しかし、5期生以降国立大学の法人化に伴って大学全体で非常勤講師予算が削減されている。本学における予備教育でも、留学生センターで受け持っていた専門教科の非常勤雇用が削減対象となり、学部側のTAによる教育が開始された。

安他（2006：79）によると、非常勤削減による専門教科教育の質をどう保つかの問題は、本学に限らず「配置人数が少ない大学」に共通した悩みであり、「受け入れ人数が少ないとため、予算確保が難しく、その結果、専門教科の教育が手薄になりやすい」という法人化後の各大学の財政面の厳しさが影響している」という。本学においても日韓プログラム予備教育の質をいかに3期生までのレベルに保ち続けるかが今後の大課題の一つである。

2) 卒業後の進路、特に大学院進学希望や兵役、就職について

9名中8名が就職よりもまず大学院への進学を考えている。男子の場合は兵役履行を横目で睨みながらも、大学院進学のために英語学習の必要性や進学のための資金について考えようとしている様子がわかる。

本学の予備教育でもこのような流れを受けて、専門教科の削減コマを利用して2005－6年度の第6期に「専門英語読解」を1コマ盛り込んだ。今後は、日韓プログラム生の卒業後までを視野に入れた何らかの相談体制を整えていく必要があるだろう。

2. 学部受入れ教員対象の調査を受けて

1) 学生本人が希望すれば大学院進学を優先せよと指導する

最終的な判断は本人次第だが、受け入れる側として、意志さえあれば大学院進学の門戸は開いているという姿勢を持っていることがわかる。

つまり、プログラム開始当時非常に問題だと考えられていた「進学か兵役か」の問題については、学生・教員双方において現在はさほど問題にならなくなっていることを示しているといえる。

2) 指導教員として学業面での指導をどう行えばよいか模索中である

日本語力が不足していないか心配したり、マレーシア政府派遣留学生との比較で日韓プログラム生を見ようしたりしているなど、本プログラムの学生に対しての指導の仕方が模索されている最中であると言える。予備教育との連携を強化するためにも、筆者が学部進学先の受け入れ教員とも定期的に連絡を取り合う必要性を強く感じる。

V. 日韓プログラムの今後に向けて

本学における日韓プログラムの現状は、安他（2006）の「B グループ：受け入れが比較的安定している大学」の中では、プログラムの運営が総合的にみて比較的うまくいっている例であるといえるが、上記のとおり法人化後のプログラムをめぐる状況は決して安泰ではない。本プログラムは開始当初から、人数が少ない割には手間がかかりすぎるという面も持ち合わせているからである。

しかしながら、日韓プログラムはそもそも「21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップのための行動計画」⁹に沿って始まったものであるということをここで今一度思い起こすべきである。両国の関係は、首脳の相互訪問や文化交流などを通じ、かつてとは比べものにならないほど進展したが、一方では歴史認識の問題などにより、時として交流の度合いが一進一退を繰り返している事実も厳然としてある。そのような中で、日韓プログラムを通じた交流は、当初の目的どおり「新たな日韓パートナーシップ」へ向けた不变のものであることを、本学も日韓プログラムを通して示し続けていくべきだと筆者は考える。

参考文献

- 安龍洙・金重燮・酒匂康裕・趙顯龍（2006）「日本における日韓理工系学部留学生事業の実施状況に関する報告—21大学を対象に実施したアンケート調査に基づいてー」、『茨城大学留学生センター紀要』第4号、77-106
- 太田亨（2001）「金沢大学における日韓共同理工系学部留学生受け入れ事業の取り組みについて」、『金沢大学留学生センター紀要』第4号、53-80
- 金重燮（2005）「慶熙大学校における6期生の予備教育の状況及びプロジェクトについて」、『平成17年度日韓共同理工系学部留学生事業協議会資料（2005. 7. 22）』、広島大学留学生センター、1-27
- 金重燮・趙顯龍・柳志潤・安龍洙（2005）『韓日工科大学学部留学生派遣事業－評価及び運営方案研究』、大韓民国教育人的資源部国際教育振興院〔原文、韓国語〕
- 齋藤美智子・田山のり子・太田亨（2004）「日韓共同理工系学部留学生に対する3大学共同意識調査－留学志望から学部進学までー」、『岡山大学留学生センター紀要』第11号、59-77
- 横浜国立大学留学生センター（2003）『2003年度日韓共同理工系学部留学生事業協議会 日韓共同理工系学部留学生事業の課題と今後の展開』

付録

1. 金沢大学における日韓共同理工系学部留学生 FD アンケート（学生用）

プログラム第（ ）期

名前：_____ 性別：男・女

学部：工・理 学部（○をつけてください）（ ）学科

1) 現在の生活リズムと健康状態

⑤□ とても良い ④□ 良い ③□ 普通 ②□ 悪い ①□ 大変悪い

「悪い」と「大変悪い」の場合は具体的に何がどう悪いのか書きしてください。

2) 現在まで単位取得は予定通りに進んでいますか？（□を入れてください。）

①□ はい ②□ いいえ（なぜ→ ）

3) 教養的科目について、具体的にどの科目がやさしく、どの科目が難しかったか。

4) 学部の専門科目について、具体的にどの科目がやさしく、どの科目が難しかったか。

5) 卒業研究で行いたいと考えている（または、現在行っている）内容について簡潔に書いてください。
(少々専門的な内容になってもかまいません。)

6) 大学生としての生活で特にしている活動（クラブ・サークル活動、大学外での活動）

①□ なし ②□ あり（何？ → ）

7) 卒業後の進路について、男子の場合は兵役の予定とあわせて書いてください。

8) 学部入学後から見た、留学生センターでの予備教育中の指導内容に対するコメントや要望（日本語教育面、専門教科教育面、生活面、健康面、情報面など）

9) 日韓両政府に対する事業全体に関することも含めて、その他、特に付け加えたいこと

2. 金沢大学における日韓共同理工系学部留学生 FD アンケート（受入教員用）

御芳名：_____

御所属：_____ 職名：_____

受け入れた日韓共同理工系学部留学生について

第（ ）期生

（第1期→2000-2005、第2期→2001-2006、第3期→2002-2007、第4期→2003-2008）

名前：_____ 性別：男・女

学部：工・理 学部（○をつけてください）（ ）学科

1) 受け入れ学生の「学部生」としての全体的な評価（□をお入れください。）

④□ とても良い ③□ 良い ②□ 悪い ①□ 大変悪い

（「悪い」と「大変悪い」の場合は具体的に何がどう悪いのかお書きください。）

2) 学業面に対する評価と所見（□をお入れください。）

④□ 大変良好 ③□ 良好 ②□ 心配 ①□ 大変心配

（「心配」と「大変心配」の場合は具体的に何がどうなのかお書きください。）

3) 単位取得面に対する評価と所見（□をお入れください。）

④□ 大変良好 ③□ 良好 ②□ 心配 ①□ 大変心配

（「心配」と「大変心配」の場合は具体的に何がどうなのかお書きください。）

4) 生活面における所見（□をお入れください。）

④□ 大変良好 ③□ 良好 ②□ 心配 ①□ 大変心配

- (「心配」と「大変心配」の場合は具体的に何がどうなのかお書きください。)
- 5) 学習方法や進路、卒業研究などについて定期的に相談しに来ているか。(□をお入れください。)
- ①□ 来ている、頻度は（ ）[年、ヶ月、週間]に（ ）回程度
②□ ほとんど、または、まったく来ない
- 6) 日韓共同理工系学部留学生を学科に受け入れての感想(□をお入れください。)
- ④□ とても良い ③□ 良い ②□ 悪い ①□ 大変悪い
(「悪い」と「大変悪い」の場合は具体的に何がどう悪いのかお書きください。)
- 7) 韓国人男子は遅くとも満27歳までに2年～2年5ヶ月の兵役義務があります。卒業後の進路について、男子留学生が大学院を志望する場合、兵役をいつ果たすか悩んでいるケースが多く見られます。例えば、一般的に言って、兵役を先にした場合、大学院進学までに空白期間ができてしまい、勉学に遅れをとるのではないかという不安を感じるようです。受け入れた学生が大学院を志望し、兵役か進学かについての相談を受けられた場合、具体的にどのような御指導をなさいますか。
- 8) 本事業を通して、日ごろからご負担に感じられることは何ですか。下の中から選び、該当するものすべてに□をお入れください。
- ① 受入れ事業への参加 □ ⑧ 学生への連絡 □
② 受入れ選考業務 □ ⑨ 事業に関する情報収集 □
③ 学業・進路指導 □ ⑩ 留学生センターとの連絡 □
④ 生活指導 □ ⑪ 予備教育への関与 □
⑤ 住居保証 □ ⑫ その他 □
⑦ 学生との人間関係 □
- 9) 学部受け入れ後から見た、留学生センターでの予備教育中の指導内容に対する御要望(日本語教育面、生活指導面、情報面、連携面等)がありましたらお書きください。
- 10) 事業全体に関して、ご意見・ご質問等がありましたらお書きください。

要 旨

金沢大学における日韓共同理工系学部留学生事業に関する中間評価として、第1期から第4期の学生と学部で学生を受け入れた教員を対象にアンケート調査を行った。本稿はその結果をまとめて公表するものである。また、予備教育を担当する立場から今後の事業に対する提言もあわせて行った。

An interim report of evaluation for the Japan-Korea Joint Exchange Program for Science and Engineering Students

Akira Ota

As a midterm evaluation of the Japan-Korea Joint Exchange Program for Science and Engineering Students, I have applied two forms of questionnaires to nine students of the 1st-4th-term-program and their tutorial professors respectively. This paper publishes the results and, I have added, in the last chapter, comments and proposals for the near future of the program.

注

¹ 平成17年11月10日に大韓民国教育人的資源部国際教育振興院より第7期生の合格発表が行われた。その結果によると、金沢大学にはさらに3名（工学部電気電子システム工学科、同学部人間・機械工学科、同学部機能機械工学科に各1名）が配置される。

² 卑近な例で言えば、①金沢大学理学部が日韓プログラムに参加（第3期より）、②日韓プログラムの学生選抜方法が変わり、韓国における予備教育開始前に日本の配置先大学学部学科が決定（第4期より）、③金沢大学の法人化に伴い専門教科教育の主体が学部側に移行（第5期より）、④学部入学時のアパート賃貸の際ににおける金沢大学による機関保証制度の開始（同）、などが挙げられる。

³ 金（2005：26-27）の「資料4：1～6期の大学別配置状況」による。

⁴ 筆者は、齊藤他（2004）で、金沢大学ならびに岡山大学、東京外国语大学（学部は東京大学へ進学）で予備教育を受けた第1期から第3期までの日韓プログラム生計36名に対し、日韓プログラムをめぐり留学志望から学部進学までの間にどのようなことを感じえたかについての共同意識調査結果を公表している。

なお、日本側21大学の第5期までをより包括的に扱ったアンケート調査の結果は安他（2006）で、さらに日本側21大学に加えて韓国側予備教育に対する調査も加わった報告は金他（2005）で公表されている。

⁵ 冊子化された報告書として横浜国立大学留学生センター（2003）があげられる。この年の主な課題テーマは、1) 日韓双方の予備教育の連携の可能性について、2) 学部進学後の1～3期生の学習態度と予備教育への提言、4) 4期生の特徴、特に選抜方式が第3期までと異なり日本の進学先が決まってから韓国側予備教育が開始されることに伴う諸問題、などであった。本調査で学部教員の意見を求めたのもこのような流れを汲んだものである。

⁶ 1期生の中に、家庭の事情から休学し日韓プログラムを辞退した学生が1名いる。この学生はもちろんアンケートの対象になっていない。

⁷ 工学部で同一教員が2名のプログラム学生の指導教員となっているケースがあるためである。

⁸ そのままの形とはいえ、個人情報保護の立場から、個人名に関する部分と個人が特定されるような表現の部分は極力伏せて掲載した。

⁹ 平成10年11月9日付けの文部省学術国際局留学生課文書「日韓留学生交流について」による。